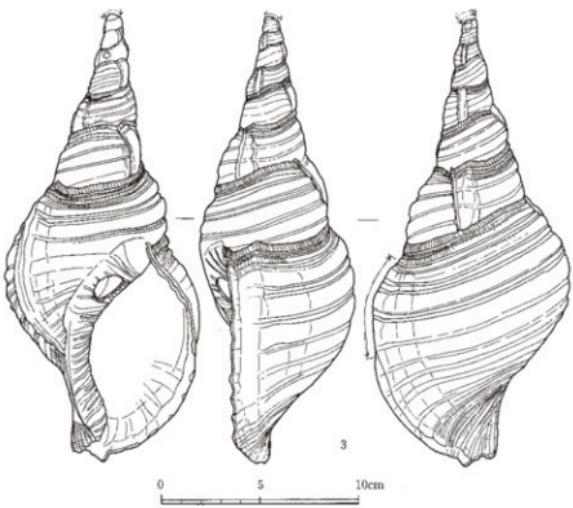
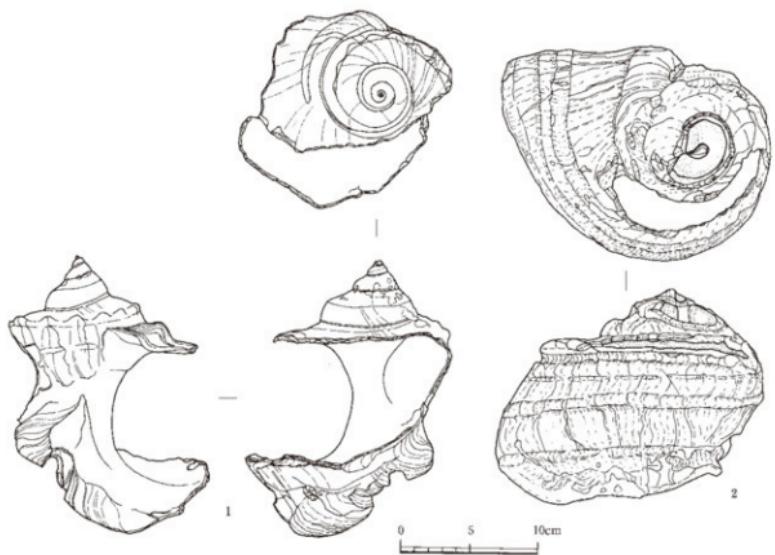
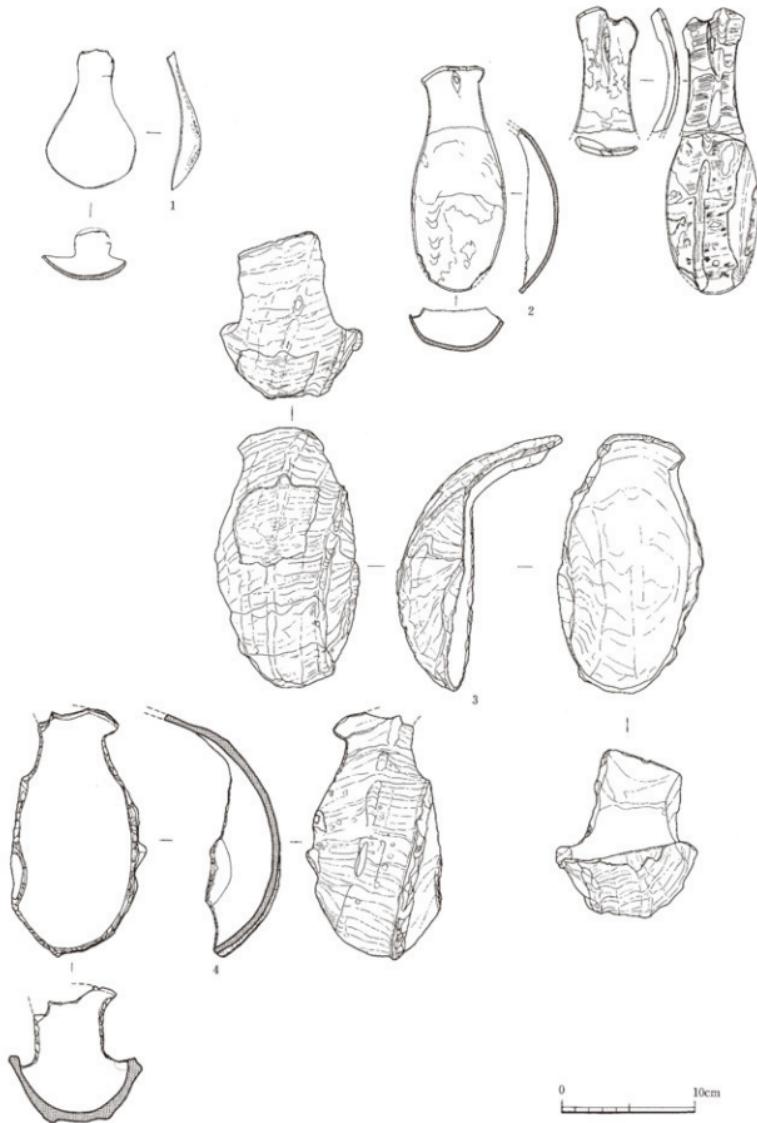


第73図 オオツタノハ (1~7)・オオベッコウガサ (8~10)・ホシダカラ (11)・フジツボ (12)



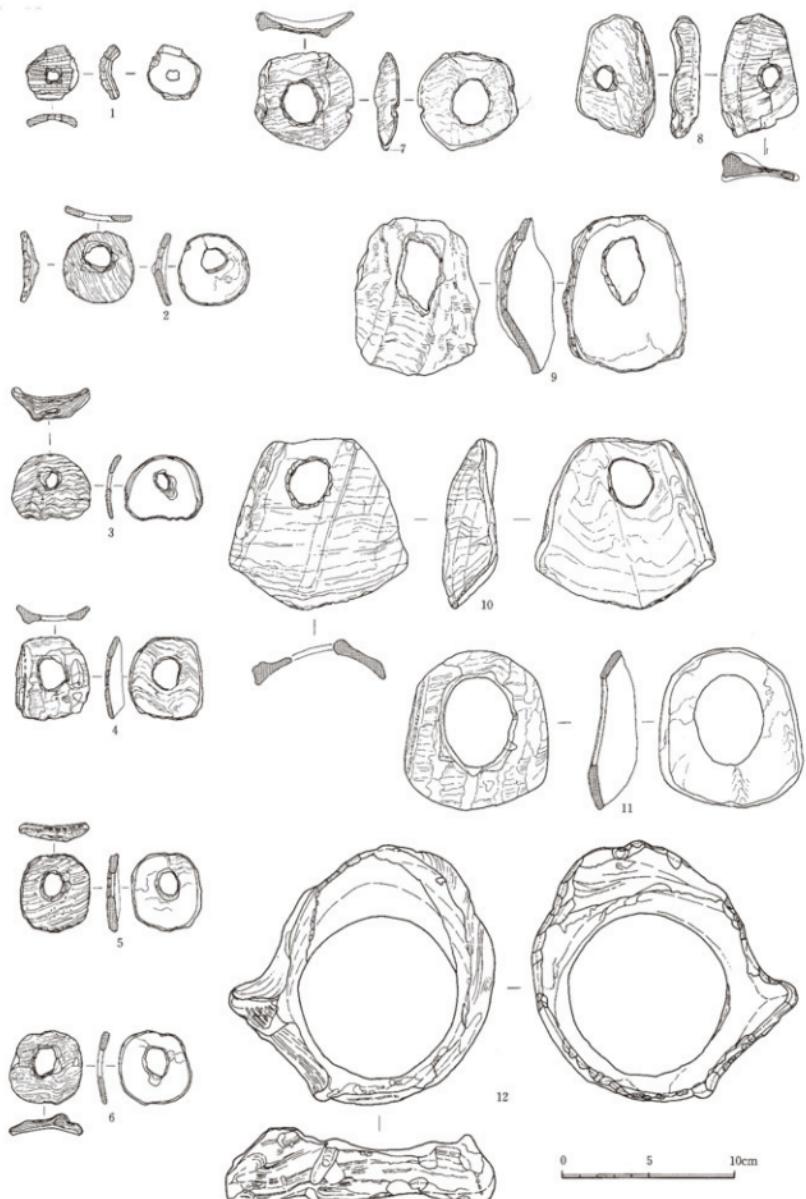
第74図 ヤコウガイ切り取り残存部（1）・ホラガイ製品（2）



第75図 ヤコウガイ・巻き貝製品（貝匙）（1：巻き貝・2：匙bタイプ 3・4未製品）



第76図 ヤコウガイ貝匙 (1:柄・4・5:身、10: 11:チョウセンサザエ)



第77図 ヤコウガイ製品（有孔）1～8：小サイズ・9・11：中サイズ 10：大サイズ 12：リング状製品



第79図 卷き貝製品

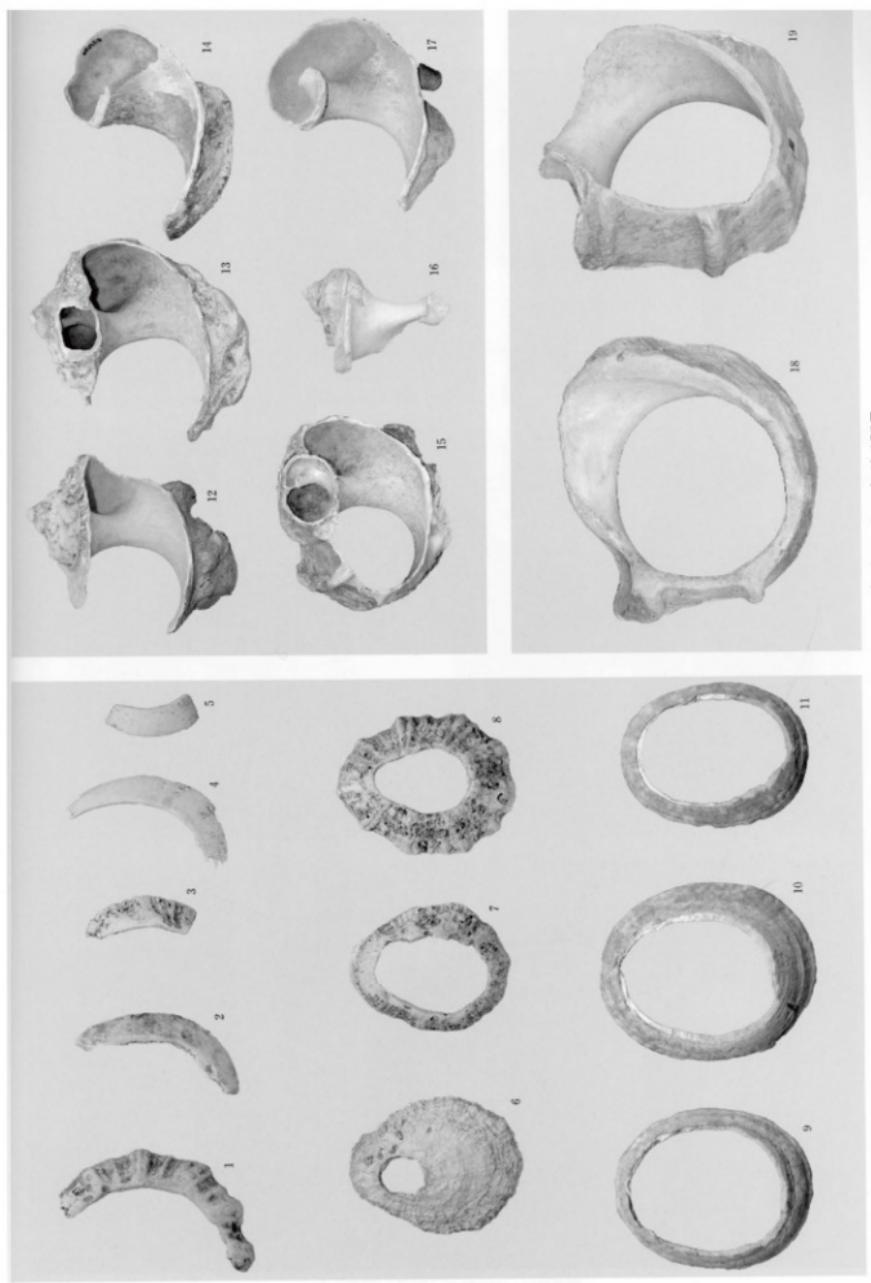
(1~8:イモガイ aタイプ、11~20:イモガイ bタイプ、21:イモガイ cタイプ、22~23:タカラガイ、24:ノジガイ、26~27:マクラガイ、28:ソデガイ類)

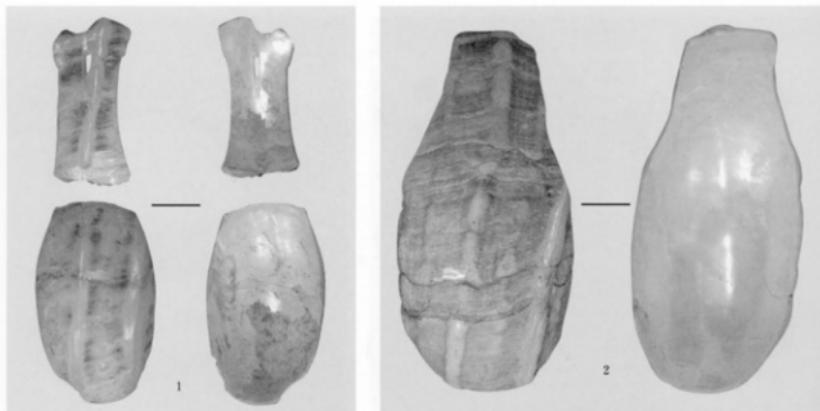
(1) 次の2つの図を用いて、**2・3・7**、**2・3・9**、**2・3・11**、**2・3・12**、**2・3・13**、**2・3・14**を解説せよ。

圖08-二級具體品

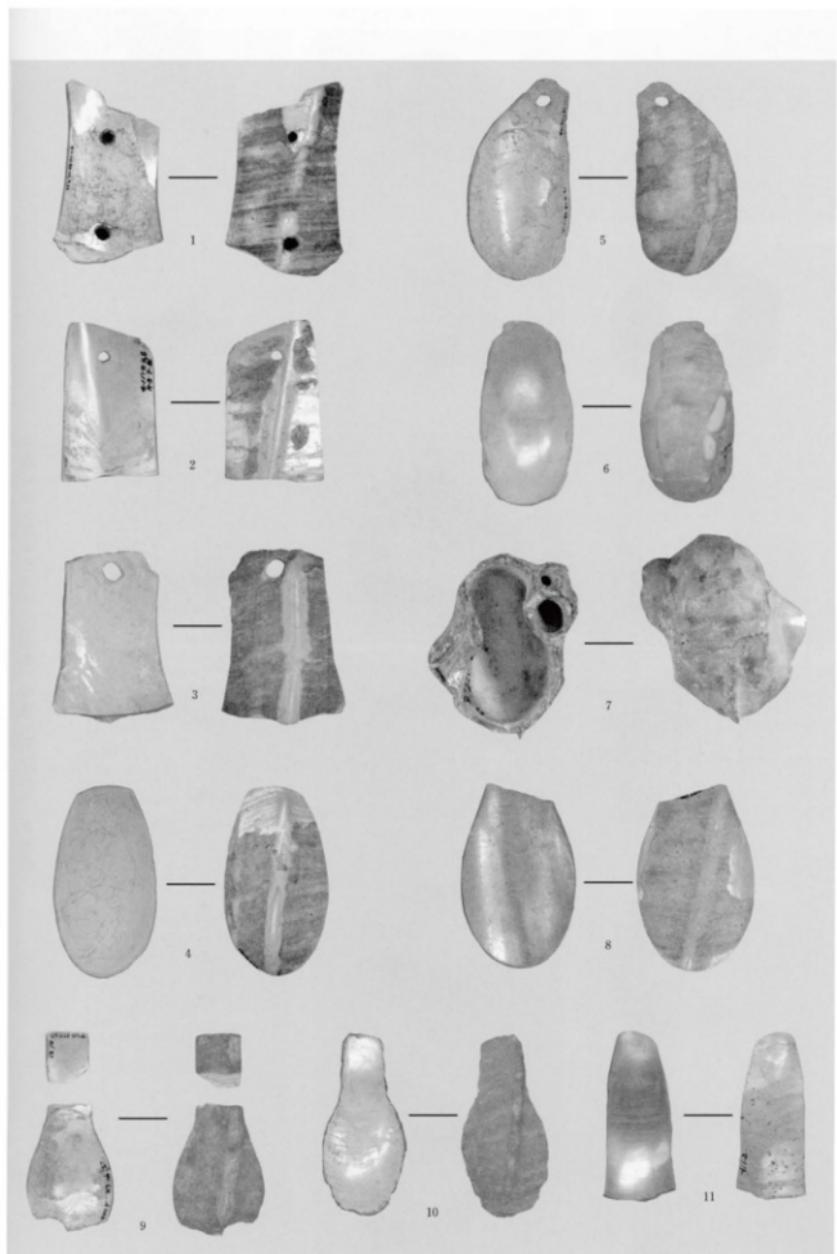


図版20 オオツタノハ・オオベッコウガサ・ヤコウガイ製品



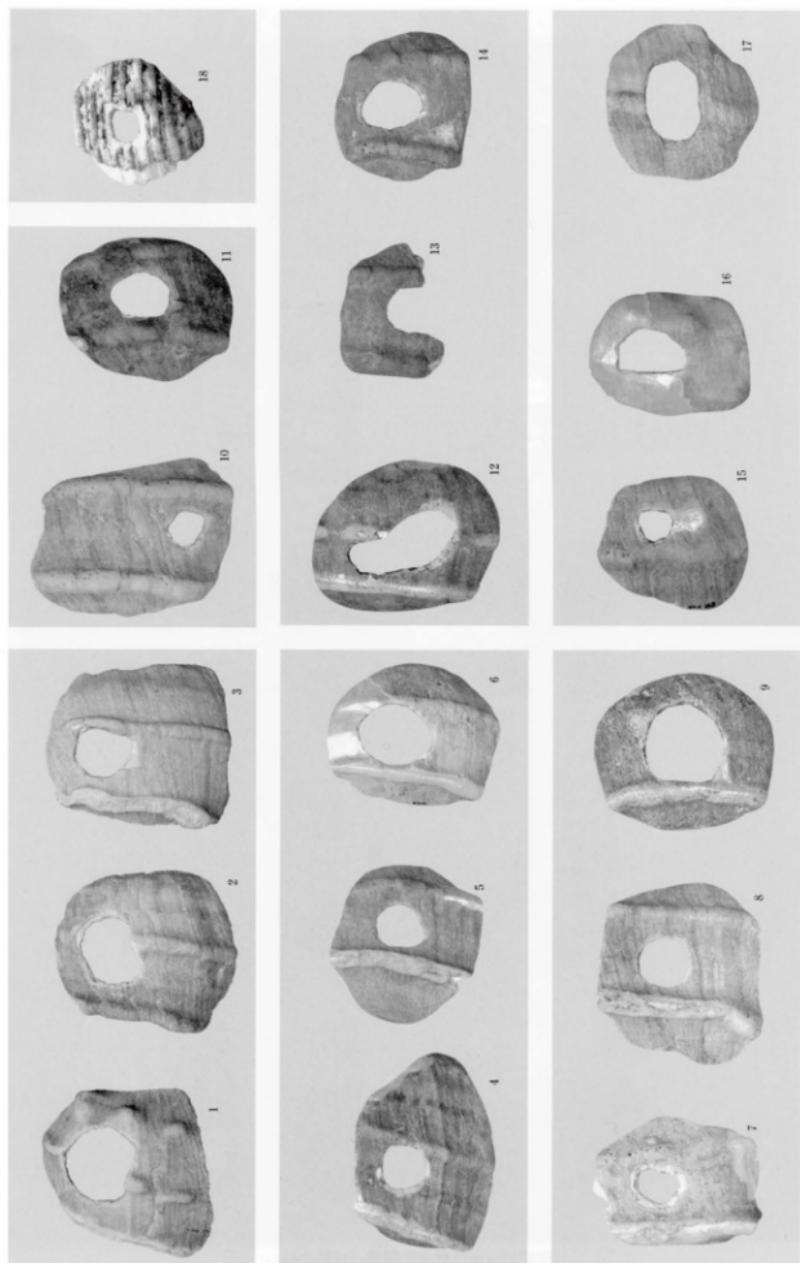


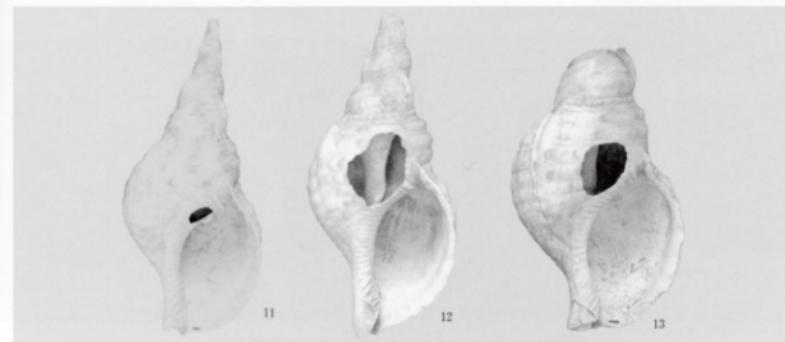
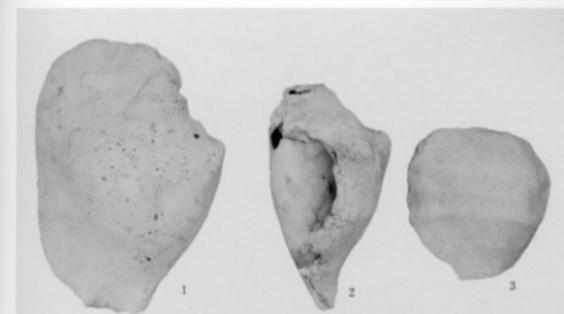
図版21 ヤコウガイ製品（貝匙1）



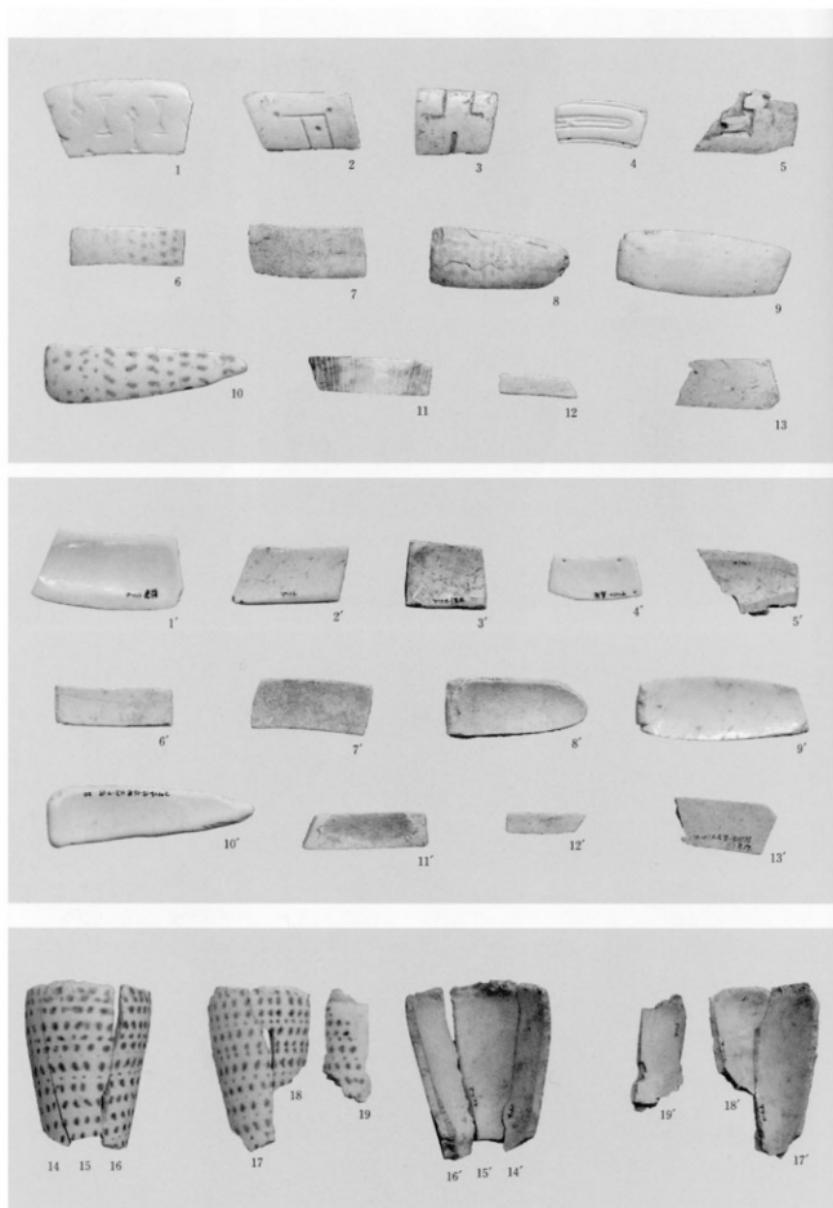
図版22 ヤコウガイ製品（貝匙 2）

図版24 ヤコウガイ製品（有孔）、チヨウセンサンザ工製品

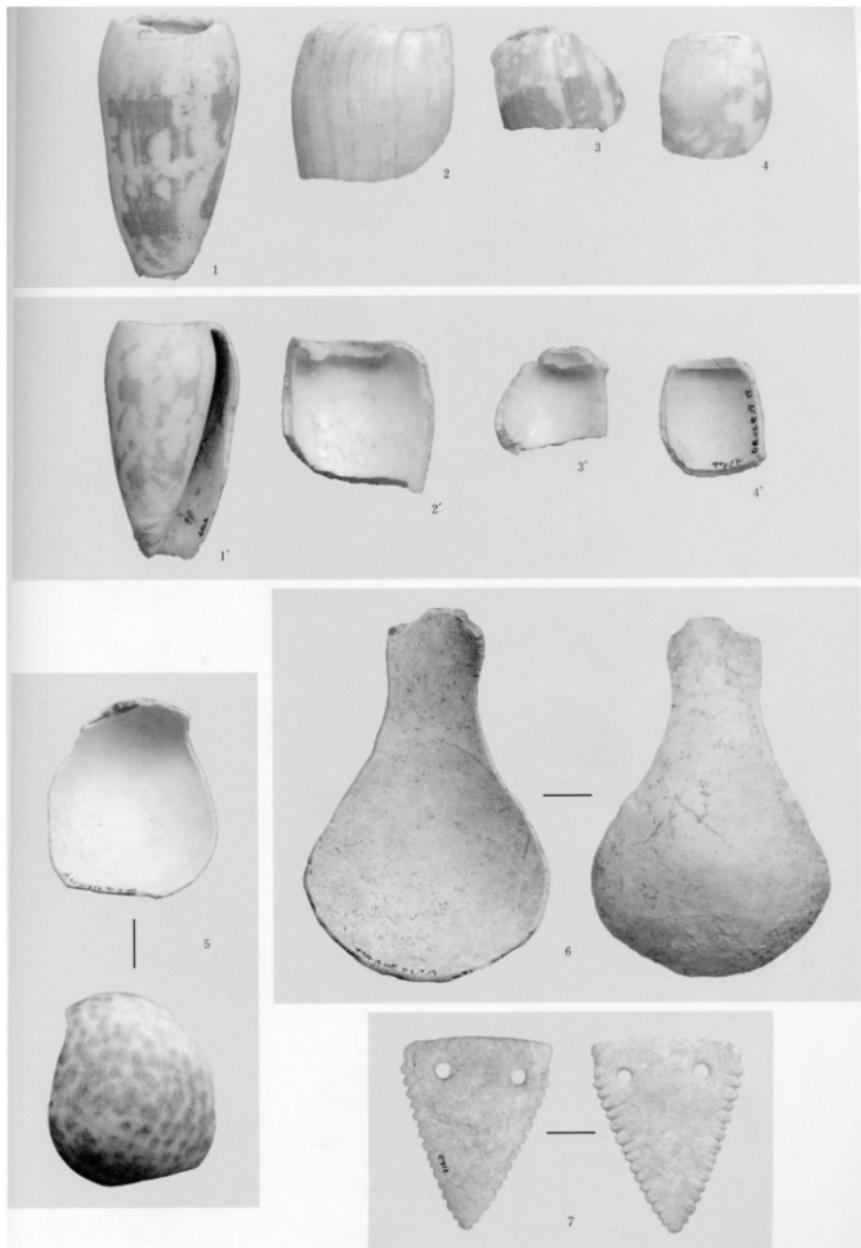




図版25 ゴホウラ、大形イモガイ・ホラガイ、他製品

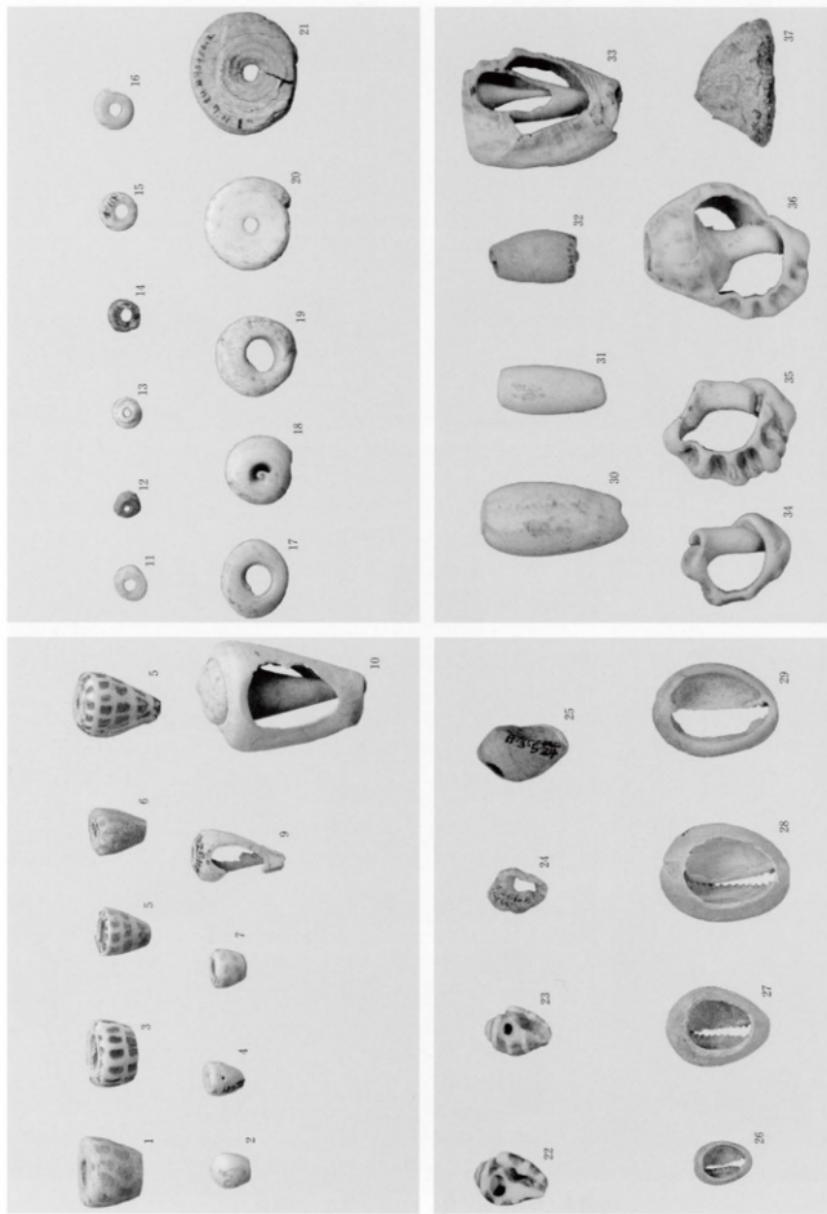


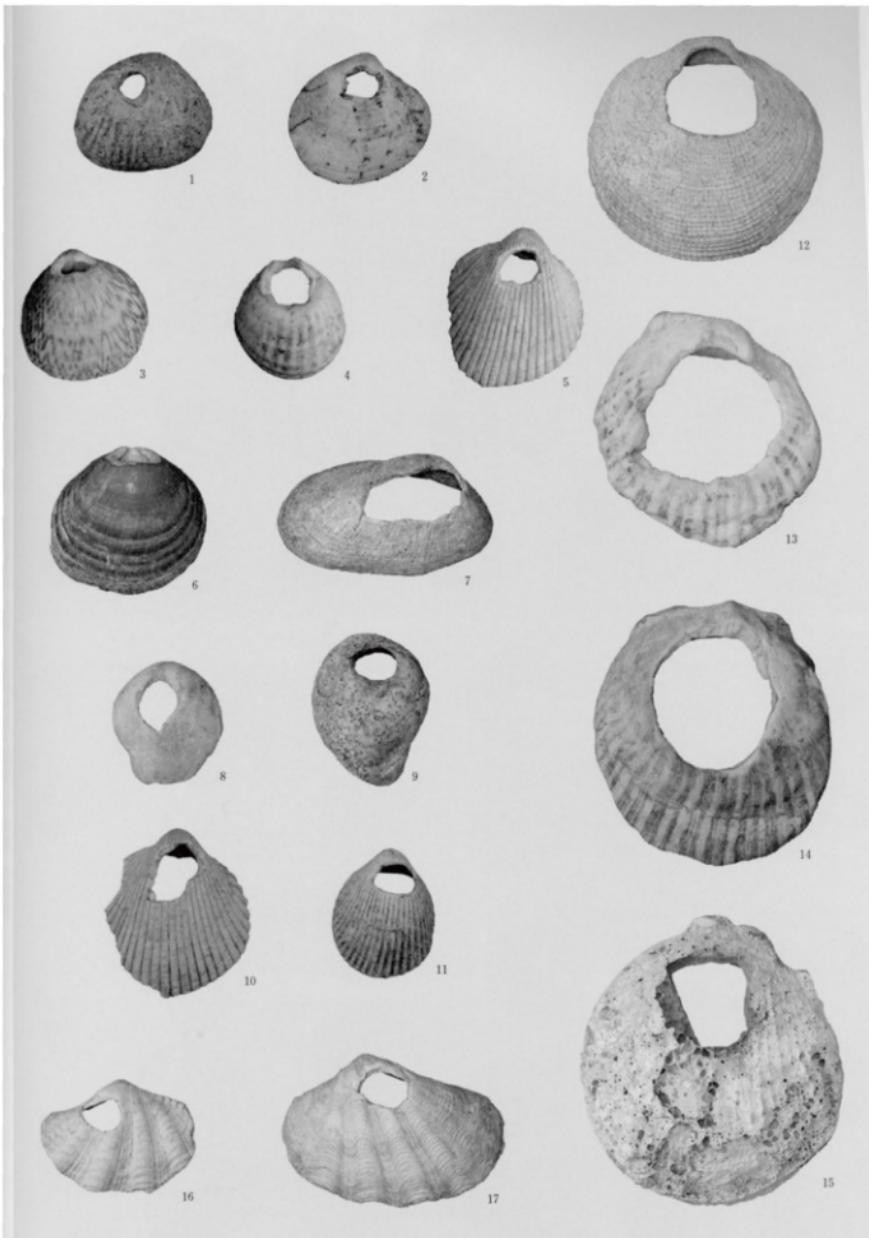
版画26 大形イモガイ、他製品（貝符・未製品）



図版27 アンボイナ・ホシダカラ・巻貝製品

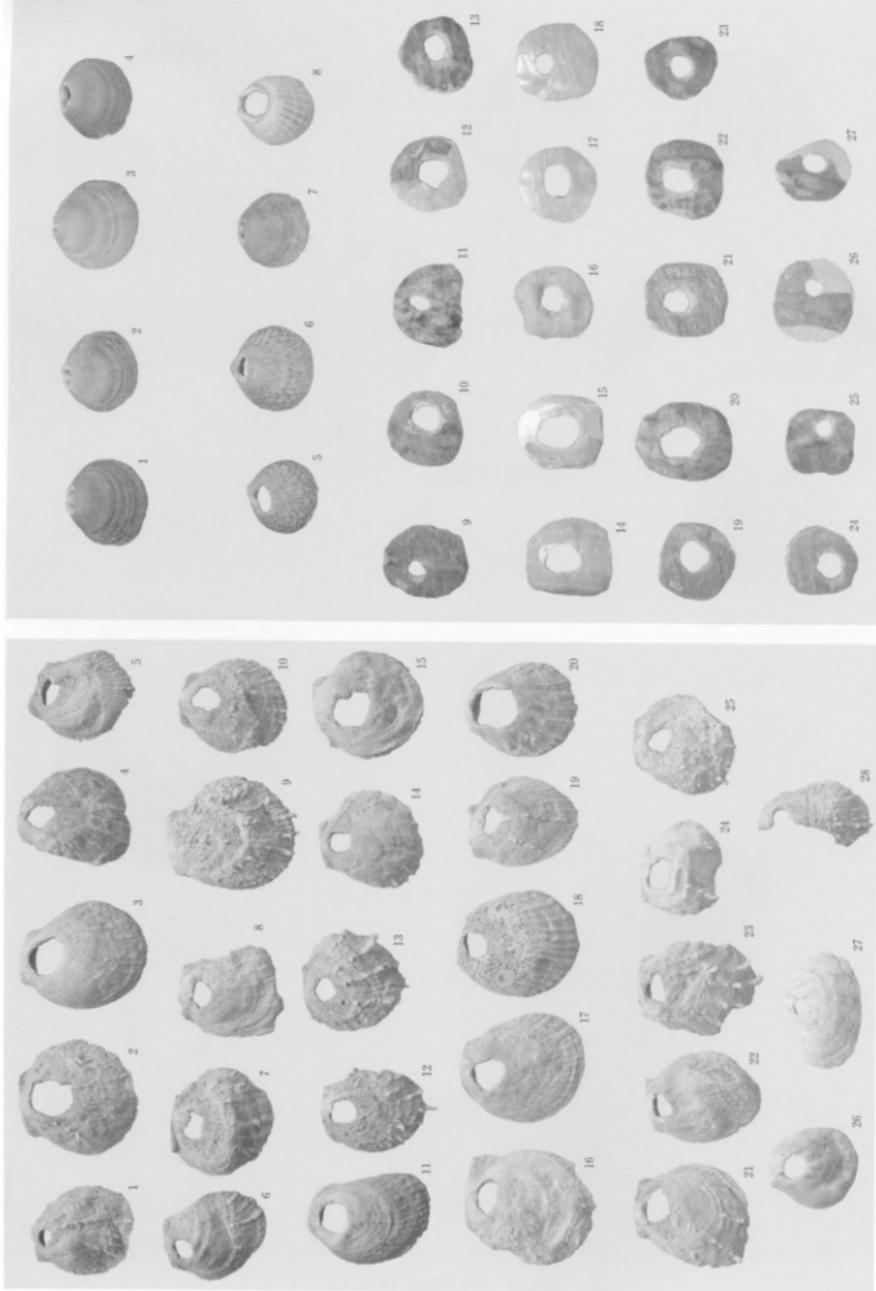
図版28 小形イモガイ、ノシガイ、タカラ貝、その他巻貝製品

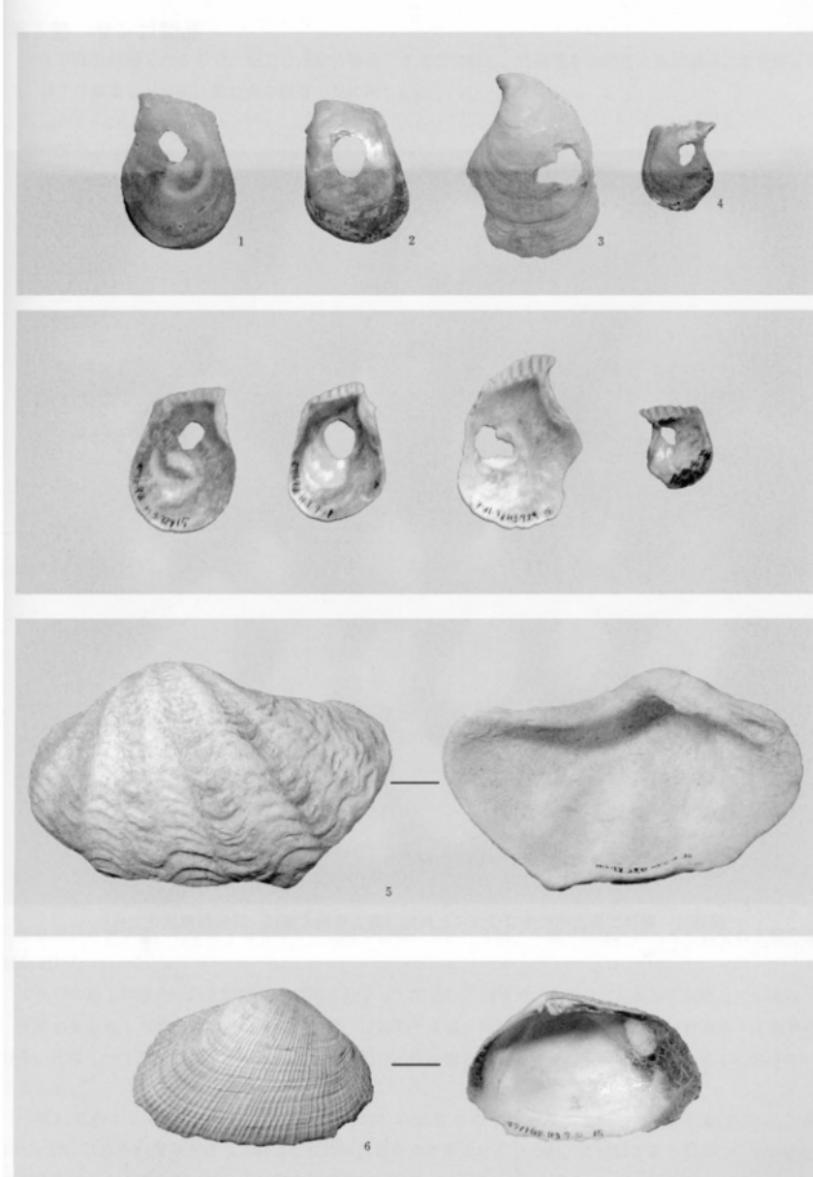




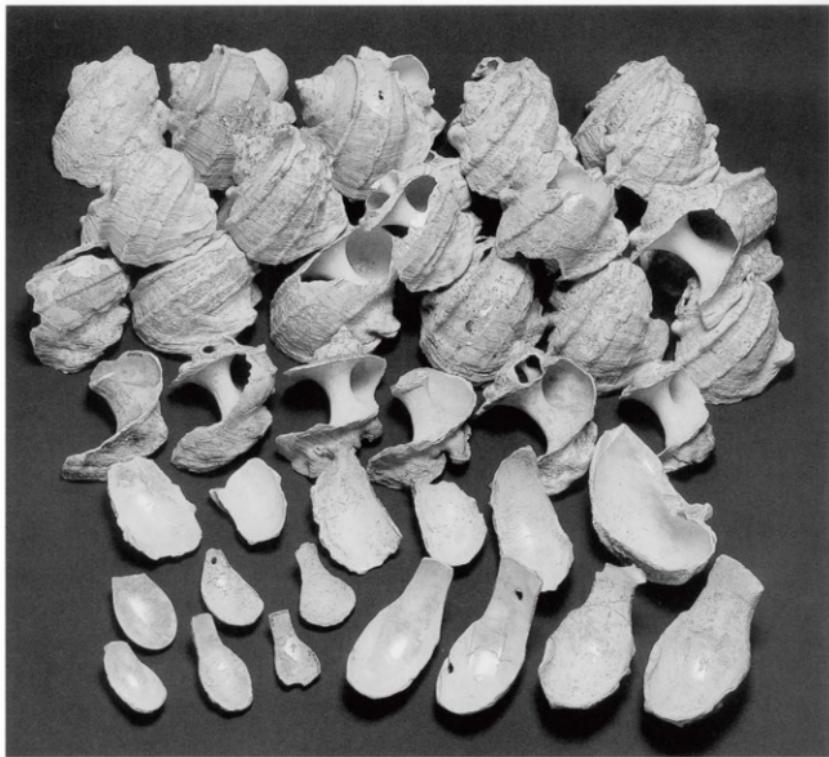
図版29 二枚貝製品（有孔1）

図版30 有孔（二枚貝・ヤコウガイ）製品（一括出土）（左12区・右：3区）





図版31 二枚貝製品（1～4ムラサキチョウガイ、5シャコガイ貝皿、6リュウキュウマスオ貝刃）



図版32 製作工程途中のヤコウガイと貝匙（考古資料大観12 貝塚後期文化より）

第3節 サンゴ製品

サンゴ礁を利用したもので、加工した管状製品、くさび状製品、自然礁を利用した板状製品、有孔製品がある。以下に略述し、詳細は第31表の観察一覧に示した。

・管状製品（第81図1・図版33-1）

直径10.9mmの円柱状に加工し、その中央に径4.8mmの孔を貫通させたもの、管状に加工したものである。24区（6）で1個得られた。製品全体に赤みを帯びる。本品の形状は管玉や管状土壤に類似している。

・くさび状製品（第81図2・図版33-2）

上面は長径12.5mmの梢円状を呈し、下面は舌状を呈するもので、側面は弧状に湾曲する。形状は三味線の爪に類似する。加工は顕著で、上部に幅2mm前後の浅い溝が施されているが、類例はなく、用途は不明である。15・16区で出土した。

・突起状製品（第81図9・図版33-5）

弧状を呈するもので、下部に径12mm×長さ10mmの突起をもつものである。

中央部分は「U」字状に凹むが、加工されたものではなく、自然の形をうまく利用している。下部突起の先端は円味があり、穿孔具などに用いられたものと思われる。

・板状製品（第81図・図版33）

板状のものは扁平のサンゴ礁の形態をそのまま利用したもの3個と手を加えたもの2個の計5個出土した。前者は厚さが6～7.5mmの扁平で小判形（第81図5）と円形（図版33-7）がある。前者は側縁の中央付近に抉りのようなものも見られ、紐を縛るためのもの。

後者は（第81図3・4）はサンゴ礁自体を加工し、板状にしたものである。前者は長方形、後者は梢円を呈する。

いずれも縁の部分に小孔が数個見られるが、サンゴの特質か、意図的な整形かは明らかでない。前者は上部は厚く、下部に薄くなり、刃状を呈する。後者は上部に同図2と同様、浅い溝が見られ、僅かだが、湾曲する点で共通するものである。

・有孔製品（第81図・図版33）

有孔製品は板状で、孔を有するもので、32区で12個、2区・4区・5区・10区・18区でそれぞれ1個の計16個出土した。

これらの出土状況をみると32区では12個まとめて出土し、18区では二枚貝有孔製品と共に伴っている。

平面形をみると方形あるいは長方形-5個、三角形-3個、円形-4個、台形-3個、分銅形-1個が見られる。孔は1～3個見られるが、その大きさは径10mm前後がほとんどで、意図的に穿孔したものは少ないようである。

一括して出土した32区の12個（第I図15～26）の大きさの平均をみると横37.7mm×縦38.7mm、重さ30.5gで、これらの重さと大きさおよび孔の大きさをグラフ4に示したが、これによると分布に一定のまとまりが見られるようである。これら12個の総重量は364.68gである。

この他に二枚貝有孔製品と一括して出土したもの（18区57）がある。

前述の有孔製品は弥生前期相当期の沖縄県木綿原遺跡の26号石棺墓近くで10個まとめて出土している例、奄美諸島では用見崎遺跡で出土している。

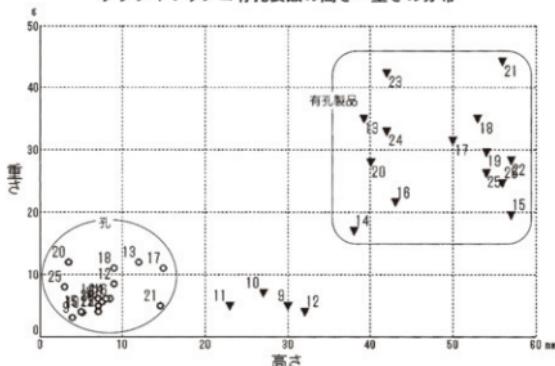
有孔製品は、ほぼ同大の石で、板状を呈し、10mm前後の自然孔を有するものと規定されるようである。また、二枚具有孔製品と共に伴すること、また、12個一括して出土することから奄美諸島や沖縄諸島の二枚具有孔製品と同じように状況が見られる。

奄美諸島では古墳時代相当期の用見崎遺跡、沖縄諸島では弥生前期相当期の木綿原遺跡で報告されている。木綿原遺跡出土のものはやや大きく、用見崎遺跡出土のものは大きさ・形状をも類似する。

〈参考文献〉

山田康弘・原田範昭1996. 3「用見崎遺跡」『研究活動報告』31. 熊本大学文学部考古学研究室

グラフ4：サンゴ有孔製品の高さ・重さの分布

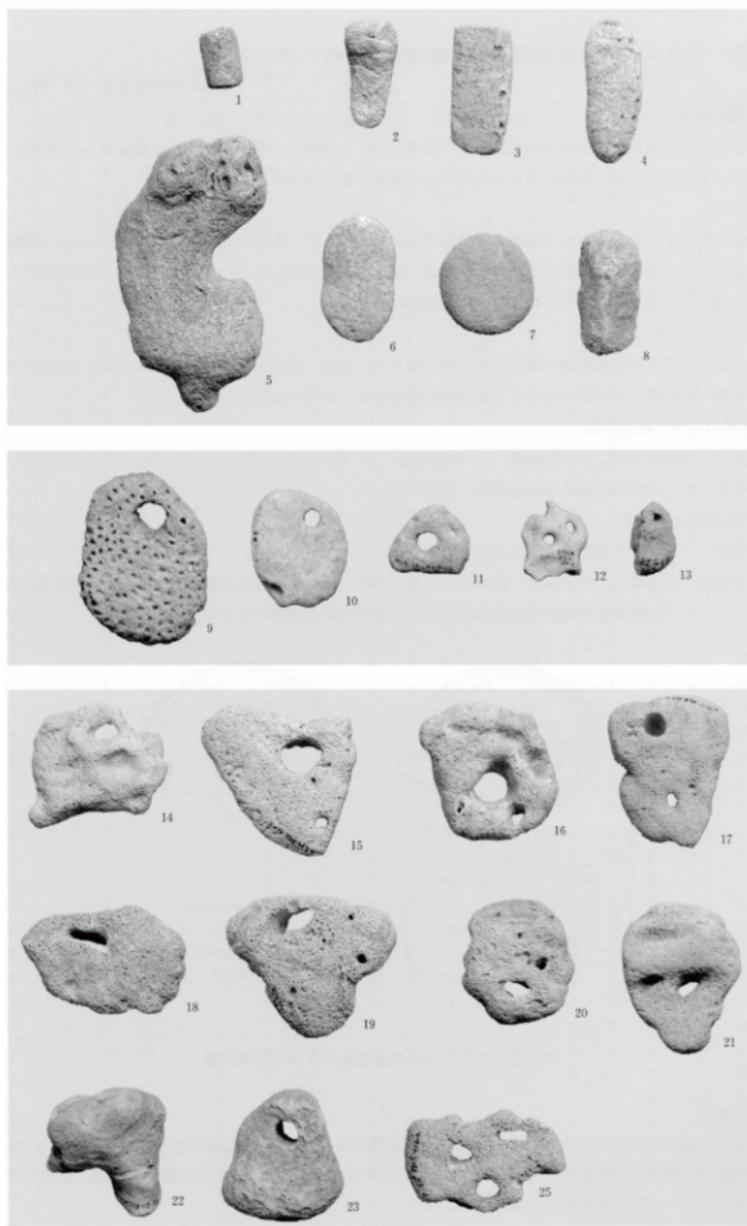


第31表 サンゴ製品観察一覧

No.	製品名	完 破	幅 mm	高 mm	厚 mm	重さ g	孔 ダ mm	孔 ミ mm	観察事項・層	区	遺物 番号	第 国 図版	
1	管状	完	18.5	10.9	4.3	2.4	4.8		管状。横断面は円形で中央を穿孔。加工は全面研磨。赤みを帯びる。管状に加工。	24区	61	第81図1 図版33-1	
2	くさび 状	完	33	16.8	9.6	4.3			全体に削られ、上部に幅1 mmの溝裏-大きく湾曲。上面は梢円を呈し、中央に径5 mm×4 mmの浅い凹み。下面は舌状。	15・ 16区	21	第81図2 図版33-2	
3	突起状	完	40	96	18.8	64			弧状、側縁は円形。上部は貝が付着し、自然、下部は径12 mm、長さ10 mmの短い突起。やや厚い。赤味を帯びる。側面に15 mmの抉り。	25区	33	第81図9 図版33-5	
4	板状	完	40	18.2	6	8			長方形縁に径3 mm程度の小孔、貫通しない。側縁は削られ、角をなす。上面は平らに削る。下端は若干円味。削られる。横断面は扁平。	19区	38	第81図3 図版81-3-3	
5	板状	完	48	17.5	7	7.8			略長方形、赤味を帯びる。裏面は抉られ、ゆるやかに湾曲。側縁に径2~3 mmの小孔が9個施されるが、貫通しない。上部に幅3 mmの浅い溝を2条施す。横断面は扁平。上の加工は(第81図2)に類似。層: 第一文化層。	3区	77	第81図4 図版33-4	
6	板状	完	39.8	12.5	6	10			小判形。側縁は円味を帯び、両側の中央部分で僅かに抉れる。横断面は扁平。	15・ 16区	20	第81図5 図版33-6	
7	板状	完	32	28	7.5	7.5			円形、幅2 mmの浅い割りが表に二条、裏に一条。全体に円味。横断面は扁平。	15・ 16区	108	図版33-7	
8	板状	完	40	22	12.3	12			長方形。上下面は円味を帯びる。横断面は三角形。	5区	61	図版33-8	
9	有孔	破	0	30	11	5	4	3	椭円か板状、円形、断面は扁平。孔(自然か、位置-上中-上中、形-円形)。	2区	57	図版33-13	
10	有孔	完	0	27	13	7	5.2	3.8	方形、板状、縁は凸凹、断面は扁平。孔(2孔、中-均等、形-椭円)。	5区	62	図版30-12	
11	有孔	完	28	23			5	7	4	椭円、板状、円味、断面は扁平。孔(自然、位置-上中-上中、形-縱横円)。二枚貝有孔製品と一括して出土。	18区	57	
12	有孔	完	28	32	8.5	4	9	8.5	略三角形。全面摩耗。自然縫、孔(位置-中央、形-ほぼ円形)。	19区	39	第81図6 図版33-11	
13	有孔	完	19	39.2	12	35	12	12	椭円形、側縁は円味を帯びる。横断面は扁平。孔(人工か、位置-上中、形-円形。縁-角を持つ)。層: 第一文化層。	4区	48	第81図7 図版33-9	
14	有孔	完	49	38	9	17	7	6	椭円形。縁は全体に薄くなるが、孔の近くは特に薄い。断面は扁平だが、片方は厚い。孔(自然可能性が高い、位置-上石、形-円形)。	10区	33	第81図8 図版33-10	
15	有孔	完	43	57	5	19.6	5	4	略台形。孔(位置-①中中(7×6 mm)、②中中(8×4 mm)、③中中(5×3.5 mm))	32区	10	第81図10 図版33-20	
16	有孔	完	51	43	10	21.6	8.5	6	不定形、表裏にクレタ状の凹み。縁は円味。上部が薄く、下部が厚い。孔(自然、位置-上中、形-椭円)。	32区	3	第81図11 図版33-14	
17	有孔	完	61	50	30	31.5	15	11	三角形、板状、縁は円味、孔(自然か、位置-上中-上中、形-椭円)。	32区	4	第81図12 図版33-15	
18	有孔	完	41	53	15	35	9	11	略方形、板状、2孔。孔(自然、位置-中中、形-円形)。	32区	4	第81図13 図版33-16	
19	有孔	完	44	54	13	29.7	7.5	5.5	台形、板状、縁は円味帯びるが、2カ所にくびれ。断面は扁平。孔(2個、位置-上中)。	32区	2	第81図14 図版33-17	
20	有孔	完	69	40	9.5	28	3.5	12	略長方形、板状、縁は円味、断面は扁平。孔(自然、位置-上中-上中、形-横椭円)。	32区	5	第81図15 図版33-15	
21	有孔	完	51	56	18	44.2	14.6	5	略三角形、板状、縁は円味、断面は扁平、下部は若干厚い。孔(位置-上中-上中、形-椭円)。	32区	7	第81図16 図版30-19	
22	有孔	完	36	57	13	28.3	7	4	略方形、板状、断面は扁平。孔(3個ではほぼ同大、均等に配置、形-椭円)。	32区	12	第81図17 図版33-24	
23	有孔	完	55	42	18.5	42.4	7	4	分銅形、板状、縁は円味、断面は扁平。孔(自然、位置-中中、形-椭円)。	32区	1	第81図18 図版33-21	
24	有孔	完	41	42	28	33	8	6	不定形、円味。孔(自然、位置-上、側面から貫通、形-不定形)。	32区	11	第81図19 図版30-22	
25	有孔	完	41	54	14.2	26.3	3	8	略台形、板状、側面は円味、断面は扁平、緩やかに湾曲。孔(人工か?、位置-上中、形-円形)。	32区	9	第81図20 図版33-23	
26	有孔	完	44	56	10.2	24.7	7	5	長方形、板状、側面は円味、凸凹がある。断面は扁平。孔(3個①(6×7.5)、②(9.5×5)、位置-上中、形-椭円)。	32区	6	第81図21 図版33-25	



第81図 サンゴ製品 (1:管状・2:くさび状・9:突起状・3~5:板状・6~21:有孔製品)



図版33 サンゴ製品

第4節 マツノト遺跡出土のヤコウガイについて

矢掛町教育委員会 西野 望

1. 調査の方法

調査は1991年ならびに2004年の発掘調査時に出土したヤコウガイの殻と蓋すべてを対象として実施し、個体数の把握、大きさの計測、被熱の有無・破損状況の観察をおこなった。

(1) 個体数

遺跡から出土するヤコウガイの殻とその蓋は部分的に欠損しているものが多いため、殻については螺塔部と臍孔の数を分けてそれぞれ記録し、蓋については、完形の蓋と比較しながら、渦巻きの芯の部分を目印に3分の2以上残すものとそれ未満のものに分けて記録した。

(2) 大きさの計測

殻については最も残存率の高い殻口と次体層の接点と、殻頂（殻頂を欠損するものについては螺軸の中心）の水平距離（第82図）を計測することで大きさの統計をとった（七計測値）。

(3) 被熱の有無と破損状況

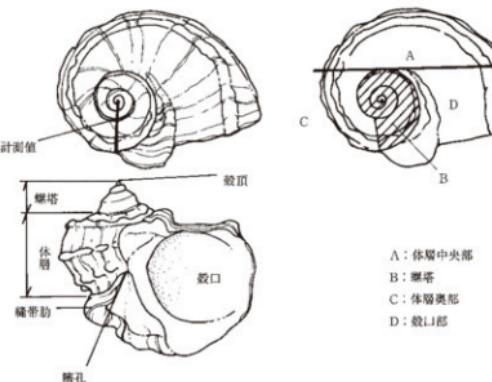
殻をA: 体層中央部、B: 螺塔部、C: 体層奥部、D: 殻口部の4部位に分け（第82図）、欠損部位と被熱箇所がそれぞれどの部位にあるのかを観察・記録した。

(4) 調査期間と参加者

・調査期間 2005年4月29日～5月3日

・調査参加者 木下尚子、中山清美、新里亮人、石堂和博、中村友昭、清水恒志、高平愛子、西野望

笠利町立歴史民俗資料館整理作業員、鹿児島県立大島北高等学校生徒



第82図 ヤコウガイ各部名称ならびに計測位置

2. 調査結果

対象とした殻の点数は1321点で、そのうち螺塔部を残すもの601点、臍孔を残すもの1228点であった。これらには螺塔部と臍孔の両者を残すもの508点をそれぞれ含んでいる。よって、殻の最小個体数は1228点である。また、蓋で3分の2以上残すものは788点であった。

さて、分析対象とした殻1321点について欠損状況別に大きさを示したものが第32表で、さらに被熱痕のある

第32表 ヤコウガイ般欠損部位別集計表

セヒ調査 (mm)	欠損部位															小計	うち被 熱痕 あり	
	完形	B	D	BD	AD	ABD	ACD	ABCD	A	AB	AC	ABC	C	BC	CD	BCD		
~14	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
~15	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	6	0
~16	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0
~17	1	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5	0
~18	6	1	0	0	1	1	2	1	0	0	1	0	0	3	0	0	16	0
~19	3	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	2	3	4	0	1	16	0
~20	4	0	1	0	1	0	2	0	2	1	4	7	0	1	0	0	23	1
~21	9	0	0	0	0	0	1	1	3	0	4	0	0	2	0	0	20	0
~22	3	1	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	2	0	0	0	10	0
~23	7	4	0	0	2	0	1	0	1	0	1	5	2	2	0	0	25	0
~24	5	1	1	0	0	0	1	0	2	3	1	1	1	1	0	0	17	1
~25	7	4	0	0	0	0	3	1	2	1	3	1	1	4	0	0	27	0
~26	5	1	0	0	0	0	1	0	1	1	2	1	1	1	1	0	15	0
~27	5	3	2	0	0	0	0	1	1	0	2	2	0	2	0	0	18	1
~28	5	1	2	0	2	3	0	0	3	4	3	1	1	2	0	0	27	1
~29	7	0	0	1	0	2	1	1	2	1	1	0	1	0	0	1	18	1
~30	5	4	2	1	1	1	4	3	4	3	1	1	0	0	0	0	30	0
~31	6	3	1	0	1	5	1	3	0	2	0	2	2	1	0	1	28	0
~32	5	4	1	0	1	0	2	0	3	1	1	2	1	1	0	0	22	1
~33	5	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	16	0
~34	0	0	0	0	0	2	2	1	1	2	1	5	2	0	0	1	17	1
~35	5	5	0	0	3	0	6	1	2	0	3	3	0	0	1	0	29	2
~36	5	4	2	1	0	0	3	2	3	0	0	1	1	1	0	0	23	3
~37	0	2	0	0	2	2	2	4	1	0	0	2	3	1	0	1	20	3
~38	0	5	0	0	2	2	2	4	6	2	1	4	1	0	0	0	29	2
~39	2	1	2	0	2	1	4	3	1	0	0	2	1	1	0	0	20	1
~40	2	4	0	1	2	2	2	1	1	1	0	4	2	3	0	0	25	4
~41	2	3	0	0	0	1	6	4	3	4	1	0	0	2	1	0	27	6
~42	8	7	1	0	4	3	7	2	2	1	1	1	1	1	0	0	39	5
~43	3	3	0	0	1	2	6	4	3	3	0	4	0	1	0	0	30	10
~44	4	2	0	0	3	2	3	2	3	6	3	0	0	1	0	0	29	17
~45	5	4	0	0	2	0	5	4	1	5	1	4	1	1	0	0	33	18
~46	4	2	1	1	2	0	3	3	2	3	0	4	1	1	0	0	27	9
~47	4	8	0	0	2	1	3	4	2	6	5	5	0	1	0	1	42	17
~48	6	9	2	0	0	0	7	3	2	5	1	1	1	4	0	1	42	21
~49	3	11	1	0	1	0	6	1	3	5	2	1	1	3	0	2	40	18
~50	5	10	0	0	1	1	5	4	0	3	0	2	1	1	0	0	33	16
~51	6	12	0	0	0	0	4	4	1	4	1	8	0	1	0	0	41	22
~52	7	7	0	0	0	2	1	1	1	3	1	4	0	0	0	0	27	17
~53	5	5	0	0	0	4	6	4	3	4	1	3	1	2	0	0	38	14
~54	4	6	0	0	0	0	2	3	2	2	1	2	0	3	0	0	25	9
~55	7	1	0	0	0	2	0	1	1	1	0	4	0	0	0	0	17	9
~56	0	5	0	0	1	0	2	0	2	2	0	0	0	0	0	0	12	5
~57	1	1	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	2	0	0	8	4
~58	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	1	0	0	0	6	3

セ計測値	完形	B	D	BD	AD	ABD	ACD	ABCD	A	AB	AC	ABC	C	BC	CD	BCD	小計	被熱痕
~59	2	1	0	0	1	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	8	5
~60	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	1
~61	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	2
~62	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
~63	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2	1
~64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
~65	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
~66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
~67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
不明	0	1	1	1	0	8	35	203	0	1	1	12	1	13	0	2	279	11
合計	181	150	21	8	41	49	148	282	79	88	50	107	33	69	4	11	1321	263

第33表 ヤコウガイ殻被熱部位別集計表

欠損部位	被熱個数	被熱部位内訳										
		D	AD	ABD	ACD	A	AB	AC	ABC	C	BC	CD
完形	44	0	2	1	1	32	1	5	0	2	0	0
B	54	2	4	0	2	33	1	9	0	3	0	0
D	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
BD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
AD	9	0	2	0	0	5	0	0	0	2	0	0
ABD	7	2	1	0	0	3	1	0	0	0	0	0
ACD	3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
ABCD	17	1	2	0	0	2	0	2	0	9	0	1
A	21	0	3	0	0	18	0	0	0	0	0	0
AB	44	0	4	0	1	26	1	8	1	3	0	0
AC	13	0	0	0	0	9	0	4	0	0	0	0
ABC	27	1	2	1	2	9	1	7	1	2	0	1
C	5	0	0	0	0	2	0	1	0	2	0	0
BC	16	2	2	0	0	6	2	3	0	1	0	0
CD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
BCD	2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
合計	263	9	22	2	6	147	7	39	2	26	1	2

個体263点について欠損状況別に点数を集計し、被熱部位の内訳と点数を示したものが第33表である。

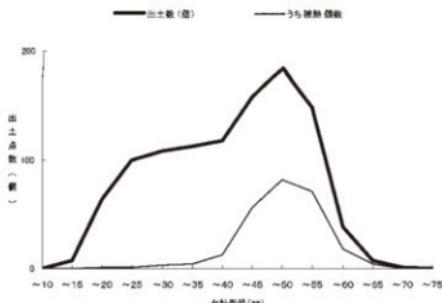
3. 出土点数ならびに殻の大きさ別によるヤコウガイ利用の実態

(1) 殻の大きさ別出土点数

第34表は第32表をセ計測値 5 mm単位で集計したもので、これをグラフ化したものが第83図である⁽¹⁾。これみると、マツノト遺跡で出土したヤコウガイは主にセ計測値（以下同じ）20~40mmと45~55mmの2つのグループに分けられる。しかし、採集する際に大きなものほど目に留まりやすいことを差し引いて考慮するとセ計測値20~40mmの比較的小さな貝の出土量が全体の約5割を占めることが特徴のひとつとしてあげられる。つまり、マツノト遺跡の人たちは大きなものほどヤコウガイを探集していたと考えられる。また、このうち被熱の痕跡を残すものは45~55mmのグループに限って多くみられるため、大きなものほど焼いて食糧にし、被熱痕のない小さなヤコウガイについては「ゆでる」などの合理的な調理方法の違いがあったのではないかと推測され

第34表 大きさ別出土点数

セチ測値 (mm)	出土数 (個)	うち被熱 個数
~10	0	0
~15	7	0
~20	63	1
~25	99	1
~30	108	3
~35	112	4
~40	117	13
~45	158	56
~50	184	81
~55	148	71
~60	38	18
~65	7	4
~70	1	0
~75	0	0
合計	1042	252



第83図 ヤコウガイの大きさ別出土分布①

る。ここでマツノト遺跡から出土したチョウセンサザエ114点を無作為に抽出し、観察したところ被熱痕のあるものは一点もみられなかった。また、分析対象とした1321点のうち被熱痕のあるものは263点で、全体の約2割を占める。大きさ別に被熱痕の有無を見た場合、セチ測値45mm～55mmの大きさのものにより多く被熱痕がみとめられたがこれらでも出土数の約5割に観察できたにすぎない。

ところで、出土した殻の中には欠損が著しく、計測できなかったものが279点含まれる。このうち螺旋塔からの大きな割り取りによって計測できなかったものは203点で、これらのはほとんどが縫帶肋をよく発達させた大型の貝であったことを付け加えておきたい（これについては後述する）。

(2) 出土点数からみたヤコウガイ利用

殻の最小個体数1229点に対し、蓋は788点が出土しており、出土比率は6:4である。ここで注意したいのは、殻の出土数が蓋の出土数を大きく上回る点である。第35表は分析対象のヤコウガイのうち、殻はセチ測値をもとに、蓋は最大径をもとに殻径を復元したものを大きさ別に集計したもので、これをグラフ化したものが第84図である⁽²⁾。これをみても復元殻径9～17cmにおいて、殻の出土数が蓋を上回ることがみてとれる。この理由としては①蓋だけが遺跡外に持ち出された、②殻だけが遺跡内に持ち込まれた、③調査区外に蓋だけが集積してありみつかっていないなどの特殊事情の3点が考えられるが、①については蓋が製品素材として価値をもつとは考えにくいので可能性は低い。②については螺鈿などの素材としての利用が考えられる。③については類例がないので、③の可能性も低い。私は②のヤコウガイの殻のみが遺跡外から持ち込まれた可能性を考えたい。

(3) 出土点数ならびに殻の大きさ別によるヤコウガイ利用の実態

出土点数ならびに殻の大きさ分布からみたマツノト遺跡のヤコウガイ利用の特徴をまとめると次のようになる。

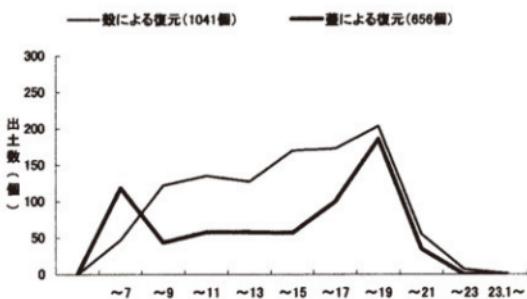
①殻と蓋の出土割合は6:4で、殻の出土量が多い。つまり、殻と蓋の多くは一対のまま遺跡内に持ち込まれ消費されたと思われるが、殻の一部はそれだけが遺跡外から持ち込まれた可能性がある。

②出土した殻の多くはセチ測値20～40mmと45～55mmの2つの大きさのグループに分けられ、うち20～40mmの比

第35表 ヤコウガイの大きさ別出土数②

復元殻径 (cm)	殻による復元 (1041個)	蓋による復元 (656個)
0	0	
~7	47	118
~9	122	44
~11	135	58
~13	127	58
~15	170	57
~17	173	100
~19	204	186
~21	55	35
~23	7	0
23.1~	1	0
合 計	1041	656

ヤコウガイ殻の大きさ分布(マツノ遺跡)



第84図 ヤコウガイの大きさ別出土分布②

較的小な貝が全体の約5割を占めることからマツノ遺跡の人たちは大きさの別なくヤコウガイを採集していたと考えられる。

③食糧としてのヤコウガイは被熱痕の有無から大きいものと小さいもので調理方法に違いがあったと推測される。

④被熱の痕跡を残すものは全体の2割である。また、大きさ別にみた場合、ピークのひとつであるセ計測値45~55mmに被熱痕の割合が多いが、それでも出土数の約5割にすぎず、残りの5割に食糧残滓以外の利用方法があったと考えられる。

4. 殼の割り取りについて

(1) 分類

遺跡から出土するヤコウガイの主たる利用法は、①食糧残滓、②製品製作あるいはその残滓、③交易品あるいは交易品の残滓であると想定し、殼の割り取りから第36表のように分類をおこなうことでマツノ遺跡におけるヤコウガイ利用の実態を把握しようと考えた。なお、交易品とは螺鈿の原材料を想定している。ヤコウガイは食糧や貝匙など製品素材として縄文時代から近世にいたるまで琉球列島の人々に普遍的に利用されているが、殼が大きく、厚みのある真珠層をもつヤコウガイにしかない特質を最も活かした利用方法は螺鈿素材であると私は考えている。螺鈿の技術が成立し、素材としての需要が高まったことで、以前とは違うヤコウガイの価値が琉球列島の人々の間で広まったと考えられる。さて、交易品としての原材料を供給地から消費地へ運ぶには、①原材料をそのまま運搬する、②加工して運搬する2通りが考えられる。『正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告』⁽³⁾によると、螺鈿の工芸品では「ヤコウガイの殼のいかなる部分も全く無駄なく利用し」、「ヤコウガイの蓋或いは未成殼を原材料としたと思われるものは皆無で、殼の厚い老成殼のみを用いている」。また、琉球王府の螺鈿製作を担っていた御細工所跡⁽⁴⁾から出土するヤコウガイの多くは体層を大きく欠損している⁽⁵⁾。以上からみると、交易に使われたヤコウガイには、大きな貝が加工されぬまま消費地に運ばれた可能性と、粗加工された大きな破片が運ばれた両方の可能性がある。以下これについて両面から検証していきたい。

(2) 分析

第36表の分類にしたがって集計したものが第37表である。第37表をI~V類の大分類で集計したものが第38

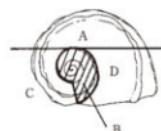
第36表 割り取りと利用に関する分類

割り取りのパターン	欠損する部位 ^(注1)	推測される利用方法	* () 内は対応する製品 ^(注2)
I : 体層を残すもの 	i 完形	食糧残滓・製品製作用・交易品	
	ii B	食糧残滓・製品製作用・交易品	
II : 蔽口から欠損するもの 	i D	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品)	
	ii BD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品)	
	iii AD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)	
	iv ABD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)	
III : 蔽口から大きく欠損するもの 	i ACD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)・交易品残滓	
	ii ABCD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)・交易品残滓	
IV : 体層途中を欠損するもの 	i A	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)	
	ii AB	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)	
	iii AC	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)	
	iv ABC	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品・貝匙)	
	v C	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品)	
	vi BC	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品)	
V : 特殊な欠損をするもの 	i CD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品)	
	ii BCD	食糧残滓・製品製作残滓(有孔製品)	

注1 欠損部位のアルファベット記号は図1に対応する。

注2 ヤコウガイ製品の名称については各報告書で違いがみられるため、ここでは「有孔製品」とはヤコウガイの殻に孔をうがったもの、「貝匙」とは蔽の体層を用いた容器状・匙状を呈するもの全てを含めた。

＊＊模式図凡例 白抜き：欠損部分 網掛：残存部分

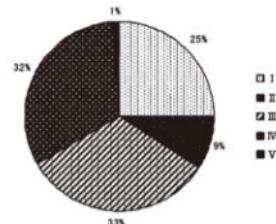


第37表 欠損部位別出土点数①

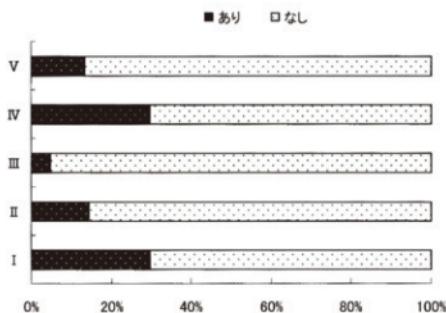
欠損部位別分類		被熱痕 あり	被熱痕 なし	小計	合計
I 体層を残すもの	i 完形	44	137	181	331
	ii B	54	96	150	
II 裂口から欠損するもの	i D	1	20	21	119
	ii BD	0	8	8	
	iii AD	9	32	41	
	iv ABD	7	42	49	
III 裂口から大きく欠損するもの	i ACD	3	145	148	430
	ii ABCD	17	265	282	
IV 体層途中を欠損するもの	i A	21	58	79	426
	ii AB	44	44	88	
	iii AC	13	37	50	
	iv ABC	27	80	107	
	v C	5	28	33	
	vi BC	16	53	69	
V 特殊な欠損をするもの	i CD	0	4	4	15
	ii BCD	2	9	11	
合計		263	1058	1321	

第38表 欠損部位別出土点数②

欠損部位別分類	被 热 痕		計
	あり	なし	
I 体層を残すもの	98	233	331
II 裂口から欠損するもの	17	102	119
III 裂口から大きく欠損するもの	20	410	430
IV 体層途中を欠損するもの	126	300	426
V 特殊な欠損をするもの	2	13	15
計	263	1058	1321



第85図 欠損部位別出土割合

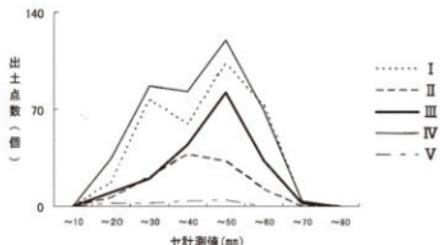


第86図 欠損部位別被熱痕有無の割合

第39表 欠損部位・大きさ別集計表

凡例 有：被熱痕あり 無：被熱痕なし

七計測値 (mm)	I		II		III		IV		V	
	有	無	有	無	有	無	有	無	有	無
~15	0	2	0	1	0	0	0	3	0	1
~20	0	15	0	5	1	9	0	32	0	1
~25	0	41	0	4	0	9	1	44	0	0
~30	1	35	1	16	0	11	1	41	0	2
~35	0	34	2	15	0	18	2	38	0	3
~40	2	23	2	19	0	27	8	35	1	0
~45	17	24	7	12	4	39	28	26	0	1
~50	34	28	2	11	2	37	42	24	1	3
~55	36	24	2	6	4	22	29	25	0	0
~60	7	5	1	3	1	6	9	6	0	0
~65	1	1	0	0	1	1	2	1	0	0
~70	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
不明	0	1	0	10	7	231	4	24	0	2
小計	98	233	17	102	20	410	126	300	2	13
合計	331		119		430		426		15	

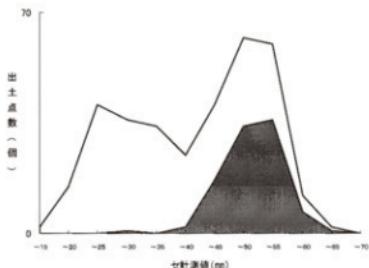


第87図 大きさ別出土点数の推移

表で、出土割合をグラフ化したものが図85である。これをみると、欠損部位別による割合はⅢ類：穀口から大きく割りとるものが33%で最も多く、ついでⅣ類：体層の途中を欠損するものが32%、Ⅰ類：体層を残すもの25%、Ⅱ類：穀口から体層の半分ほどを割りとるもの9%、Ⅴ類：特殊な欠損をするものの1%の順で多い。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類で出土数全体の90%を占めるため、マツノ遺跡のヤコウガイ利用は主にこれら3類型に集約されているといえる。

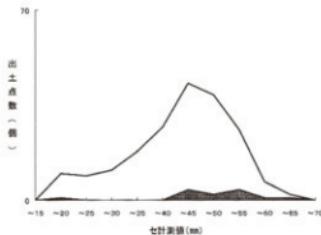
さてここで、割り取りとは別に穀のどの部分に被熱痕があるかを調べた結果、体層中央部（A）：227点、螺旋塔（B）：12点、体層奥部（次体層付近）（C）：76点、穀口付近（D）：41点で、体層中央部に圧倒的に多く被熱の痕跡がみとめられた。これはヤコウガイの穀口を上にしてつぼ焼きにした場合、火をうける最も合理的な部位である。つまり、比較的大きなヤコウガイに被熱痕が多いのはつぼ焼きにして食されたと考えてよい。また、どの割り取りにおいても割合の違いはあれ、被熱痕をとどめるものがみられることからヤコウガイの多くはまず食糧として利用されたと考えられる。第86図はⅠ～Ⅴ類について被熱痕有無の割合をグラフ化したものである。もっとも被熱痕の割合が高いⅠ・Ⅳ類はともに被熱のものを3割程度含む。対してⅢ類に被熱痕をとどめるものは1割以下で、Ⅰ・Ⅳ類に比べて、Ⅲ類は食糧以外に利用する方法があったのではないだろうか。

■ I 被熱痕あり □ I 被熱痕なし



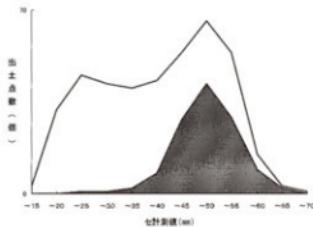
第88図-1 I類の大きさ別出土点数の推移

■ III 被熱痕あり □ III 被熱痕なし



第88図-2 III類の大きさ別出土点数の推移

■ IV 被熱痕あり □ IV 被熱痕なし



第88図-3 IV類の大きさ別出土点数の推移

さらに、割り取りの分類を七計測値の大きさ別に集計したものが第39表である。これをグラフ化したものが第87・88図である。第87図をみるとI・IV類は七計測値30mmから60mmまでにふたつのピークをもつものの、どの大きさのヤコウガイも一定量の出土があるが、これに対してIII類は七計測値50mmのみにピークがある。つまり、I・IV類に比べて、III類のように殻口から大きく体層を割りとるものには比較的大きなヤコウガイがとくに多く利用されており、殻の大きさに選択性がうかがえる。

第88図-1～3は、I・III・IV類をそれぞれ、被熱痕の有無に分けて、七計測値の大きさ別にグラフ化したものである。これをみると、I・IV類は大型の貝に被熱痕が多く、前述したように小型の貝との間に調理方法の違いがみとめられるとともに、大型の貝もほぼ半数が食用として使用されていたことが分かる。対してIII類はどの大きさのものもとっても被熱痕をもつものが少なく、食糧残滓以外の用途が推測される。

また、III類には螺塔からの大きな割り取りにより、七計測值得られなかった個体が203点含まれる。これはIII類の出土数の約半数を占め、観察ではこれらの多くは縫合帶をよく発達させた大型の貝であった。III類には大型の貝が突出してみられるることはさきに指摘したが、計測できなかったものを含めて考えると、殻口から大きく割り取るものには大型の貝がより選択的に使用されていた可能性が高い。

(3) 殻の割り取りからみたヤコウガイ利用

殻の割り取りからみたマツノト遺跡のヤコウガイ利用の特徴は以下のとおりである。

- ①完形を含め、体層を残すもの（I類）・体層途中を割り取るもの（IV類）・殻口から大きく割り取るもの（III

類)が全体の90%を占め、マツノト遺跡の割り取りパターンはこの3類型に集約できる。

②I・IV類は被熱痕がそれぞれの3割、III類は1割以下あり、I・IV類はIII類にくらべて食糧としたものの残渣が多いといえる。

③I類の体層を完全に残すもの、IV類の体層途中を割りとるものには小型から大型の貝までみられるのに対し、III類の殻口から大きく割りとるものには大型の貝が突出して多く、殻の大きさに選択性がうかがえる。またIII類には大きさ全体をとおして被熱痕を有するものが極端に少ない。

④正倉院の宝物材質調査によると螺鈿には「ヤコウガイの殻のいかなる部分も全く無駄なく利用している」との報告があるが、螺鈿の製作工程上、平坦面の多い体層部分が最も利用しやすいと考えられる⁽⁴⁾。また、「ヤコウガイの蓋或いは未成殻を原材料としたと思われるものは皆無で、殻の厚い老成殻のみを用いている」との指摘もあることから、ヤコウガイのIII類の出土状況は螺鈿の原材料を運搬するために、大型の貝の体層を大きく割りとて島外へ持ち出した可能性がある。しかし、現に螺殻が正倉院に伝わっている事実もあるため、ヤコウガイには加工せぬまま持ち出されたものと殻口から大きく割り取った体層部分を持ち出したものの両者が存在したと思われる⁽⁷⁾。

5. 小結～マツノト遺跡のヤコウガイ利用～

マツノト遺跡出土のヤコウガイ利用について特徴をまとめると次のようになる。

- ・食糧としてヤコウガイを大きさの別なく採集し、また、殻の大・小で調理方法に違いがあったと推測される。
- ・被熱痕のある殻は全体の約2割で、調理法の違いを考慮し最も被熱痕の割合の高いセ計測値45～55mmを観察しても、出土数の5割にすぎず、残りの5割に食糧以外の利用方法があったと推測される。
- ・殻と蓋の出土割合は6：4で、出土した殻の一部は外部から持ち込まれた可能性がある。
- ・欠損状況に着目すると体層を大きく割り取るものには大型の貝を利用するという選択性が存在する。つまり、大きな殻ほど体層を大きく割り取る傾向にある。

同様の傾向は用見崎遺跡⁽⁸⁾でもみとめられる⁽⁹⁾。ここで、マツノト遺跡からは貝符・鉄製品などが出土し、島外の人々と盛んに接触していた様子がうかがえる。これらのヤコウガイは主に琉球列島内にとどまるヤコウガイ製品として利用されたことも否めないが、製品に対応される以上の貝殻の出土から、この時期に製品製作だけでなく交易品としてヤコウガイが利用されていたと考えられる⁽¹⁰⁾。その際、貝はそのほとんどが体層部分を大きく割りとった状況で持ち出されていたと推測される。

最後にヤコウガイは波の荒いリーフの外側の崖面に生息する貝である。幼貝はリーフ内でみかけることもあるらしいが、採集には危険が伴う。また螺鈿には大きな殻を用いるため交易品としての価値は小型の貝にはない。しかし、マツノト遺跡人たちは小型のものも含めてこの貝を探集しており、まず食糧としてヤコウガイを捕獲し、その中で比較的大きな殻を交易品として利用していたのではないかと考えられる。また、殻の出土数が蓋の出土数を大きく上回るため、マツノト遺跡では他から殻を持込み、集積する交易センター的な役割を担っていたのではないだろうか。

謝 辞

この論文を作成するにあたり以下の方々にお世話になりました。深く感謝いたします。

木下尚子先生、中山清美先生、石堂和博氏（南種子町教委）、新里亮人氏（伊仙町教委）中村友昭氏（熊本大学院生）、清水恒志氏・高平愛子氏（熊本大学学部生）、笠利町歴史民俗資料館の職員のみなさん、大島北高等学校生徒のみなさん

註

- (1) セ計測値と殻径・殻長の大きさは比例関係にあるのを前提とする。
- (2) 表35・図84については木下尚子氏作図のものをご厚意により引用させていただいた。
- (3) 和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告」「正倉院年報」第18号 1996年。
- (4) 金武正紀『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集 那覇市教育委員会 1991年。
- (5) 木下尚子氏教示。
- (6) 中里尋克「古代螺鈿の研究（上）」「國華」第1199号 1995年。中里尋克「古代螺鈿の研究（下）」「國華」第1203号 1996年。螺鈿の製作工程において、ヤコウガイなどの原貝を幅5 cmほどの平板に加工する必要がある。
- (7) 小濱フワガネク遺跡では、ヤコウガイ3個体分の破片を集積した遺構が検出されている。高梨修氏は、これら3個体はすべて接合し、貝匙や有孔製品など從来のヤコウガイ製品を製作する意図とはかけはなれていると指摘している。高梨修「（予察）小濱・フワガネク（外金久）遺跡におけるヤコウガイ貝殻利用の実態」「サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流—ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学—」第2回奄美博物館シンポジウム資料 1999年。
- (8) 中山清美『用見崎遺跡』笠利町文化財報告第20号 笠利町教育委員会 1995年。山田康弘・原田範昭編『用見崎遺跡』熊本大学考古学研究室報告31 1995年。若杉竜太・尾上博一編『用見崎遺跡Ⅲ』熊本大学考古学研究室報告32 1996年。若杉あづさ編「I 用見崎遺跡Ⅳ」「熊本大学考古学研究室報告」第33集 1997年。
- (9) 辻村美代子「I 用見崎遺跡Ⅳ ヤコウガイ」「熊本大学考古学研究室報告」第33集 1997年。註(1)。
- (10) 筆者は以前、ヤコウガイの割り取りについてはすべてが製品製作によるものだと考えていた。しかし、その後、ヤコウガイの殻を観察する中で、被然痕をとどめるなど、どうしても製品製作に使われたとは考えがたいものが一定量含まれることや、琉球列島内でのヤコウガイ製品の出土状況から殻の割り取りと製品製作を即座に結びつけることは困難であると考えを改めた。

第5節 マツノト遺跡の金属製品（第90図）

愛媛大学 村上 基通

マツノト遺跡では111点におよぶ遺物が金属製品として検出されている。2点が表採品である以外は全て第1文化層出土品であり、ここで報告する資料も第1文化層出土品である。内訳は青銅製品が破片を含めて5点、鉄滓12点、繩羽口7点があり、これらを除いた約90点が鉄製品である。ただし器種が判明する鉄製品は雁又式鉄鎌1点、刀子4点、釣針2点、釘2点と少なく、用途不明の棒状鉄製品が20点程度出土している。これらを除いた大多数の鉄製品は、破片のために器種が判明しなかったり、あるいは完形であるものの機能が不詳な鉄板や鉄塊である。

(1) 青銅製刀装具<8>（図版40出土状況）

精金具と考えられる青銅製品である。略楕円形で、長軸3.6cm、短軸1.6cmである。環体の断面形は略三角形であり、内側はわずかにくぼんでいる。厚みは部分的に異なっており、また側面観も一直線ではなく、ややゆがみを生じている。

(2) 鉄鎌<1>（図版80出土状況）

完形の雁又式鉄鎌で、全長12.0cm、茎長6.6cm、鎌身の最大幅5.3cmを測る。二股の鎌身は内側に刃を有し、鎌身は茎部に向けて幅を減じ、範被ぎのやや上部で最小幅となる。1mm程度の段をもって茎部にいたり、範被ぎを形成している。茎部の幅は範被ぎ付近で幅0.7cm、端部で0.3cmである。

(3) 刀子<2、3>

2は鋒をわずかに欠き、現存長11.3cm、茎長4.3cmである。身部は明瞭な棟をもち、その最大幅は2.1cmである。弧状の刃部から茎にかけて緩やかに移行し、茎部も間から基部に向けてその幅を減じていく一方で、厚みは身部に比べ茎部が厚い。身の中位よりやや間隔で緩やかに湾曲しており、この湾曲が機能に影響を与えていたものと想定される。

3は完形の刀子であり、全長9.0cm、茎長2.2cmをはかる。身は棟が不明瞭で、諸刃状になっている。また2に比較して、茎が短く、しかも茎は刃部側に屈曲しており、身と柄は一直線にはならなかったと考えられる。

(4) 釣針<4>

軸部上部を欠損する釣針片である。針の断面形は円形で、先端には逆刺をもたない。現存長2.1cm、幅1.4cmである。

(5) 棒状鉄器<5>

一端を欠損する棒状鉄製品であり、その断面形は長方形で、現存長7.7cm、幅0.6cmを測る。用途不明であるが、定型的な鉄製品としては、この棒状製品が最も多く出土している。

(6) 板状鉄製品<6、7>

不整形の鉄製品とその破片が複数検出されている。6は全長7.6cm、最大幅2.7cmで厚みが2mm程度の鉄板である。左側の縁はやや薄くなっているが、蛇行しており、刃部ではない。7は全長7.1cm、最大幅2.1cmで、厚みが8mmをはかる厚手の鉄板である。部分的に層状の錆ぶくれが観察されるが、重量感があることから、元來厚手の鉄板であったと考えられる。その周囲は蛇行しており、刃部が設けられた形跡はない。

(7) 繩羽口<8、9>

7点の繩羽口片が出土している。8は土器の底部を転用した羽口片である。単孔式瓶のように、焼成前に穿孔された菱形ないしは鉢形の土器底部が利用されている。本来、橙色を呈した土器は、その底面が赤褐色～黒褐色に変化し、表面は発泡しており、底面を炉内に向けて使用されたことがわかる。ただし、底部付近の外側

はわずかな被熱が認められるのみで、その面積も狭い。その被熱部位が羽口としての使用時に火と接触していなかった場合を想定しても、その焼け方は非常に弱いと判断されるため、炉内への挿入が浅かったか、あるいは通常の羽口とは異なる使用法がとられていた可能性が考えられる。穿孔部分は内面で約2cmの直径があり、徐々に径を減じながら1.5cmと一旦すばまり、再度底面に向けてやや広がり、直径は1.7cmとなる。孔の内面はナデが施されて平滑であるが、最小径の部分で表面に微小な発泡が認められるようになり、色調も赤褐色、黒褐色へと急変する。したがって、孔の直径が底面部分から2mm程度減少した理由は、外から内側への炎の流れによって焼け損じたものと判断される。

一方、9は筒状の通常の羽口であったと考えられる。小片であり、外寸径、口径の断定が困難であるが、それをおおよそ4.5cm、1.3cmに復元される。表面は熱を受けて広く変色、剥落が生じており、炉内の炎との接触面積が広かったと判断される。

(8) 鉄滓<10>

小型ながら重量感のある完形の鉄滓である。磁性は弱く、表面にはわずかに赤錆を帯びている。木炭のかみ込みも全く認められない。鍛錬鍛冶の際に生じた鉄滓であると考えられる。

(9) 小結

マツノト遺跡では機能が判明する鉄製品は数が限られているものの、興味深い器種が発見された。雁又式鉄鎌は奄美大島において初めての出土であり、九州本土との関係を考えるうえで重要な鉄製品である。これに対し、報告した2点の刀子は身幅が広く、沖縄のグスク時代の刀子の特徴を有している。北と南の特徴を有する鉄製品が共存するこの奄美大島のマツノト遺跡は両地との交易、交渉を担っていたことを暗示するものといえよう。

また、櫛羽口、鉄滓が複数出土していることにより、鉄器生産が行われていたことが確実である。不整形の板状鉄製品も鉄器加工過程の一端を示すものといえよう。このほか最多の出土をみせる棒状鉄製品はそれ自体利器としての機能を有していた可能性もあるが、これらもまた製品への加工過程を示す遺物として検討する余地がある。鉄滓の特徴や羽口の焼け方を見る限りにおいては、鍛冶といつても精錬のように高温を必要とする工程ではないと推測され、わずかな不純物をもつ鉄塊の搬入を受けて、集落内で鉄器生産が行われたのであろう。マツノト遺跡に展開した集落は外部地域との関係を背景に、素材の受給、製品の搬入など鉄の道具の入手に多様な術を有していたと評価できる。その一方で、櫛羽口には甕形（鉢形）土器の底部転用品という比類のない資料を認めることができた。土器の転用品としては、古墳時代前期に出現し、中期以降本州から九州各地に拡散し、鹿児島県域でも見られる高杯転用羽口が著名であるが、それとは全く異なる羽口である。これは本遺跡あるいは当該地域で行われた鉄器生産の工夫例として現在のところは考えておきたい。

追加資料

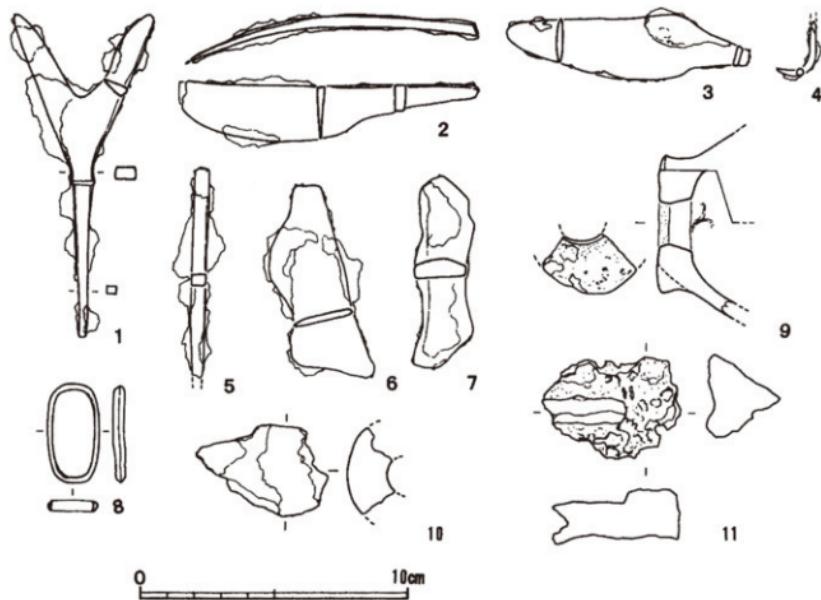
報告文作成後、出土した夜光貝の中で釣針1点が発見された。軸、針部共に欠損している。断面は略円形である。なお本資料は金属製品の総数111点の中に含まれている。



この資料は第1文化層から出土した釣り針で両先端が欠けている。(第89図)

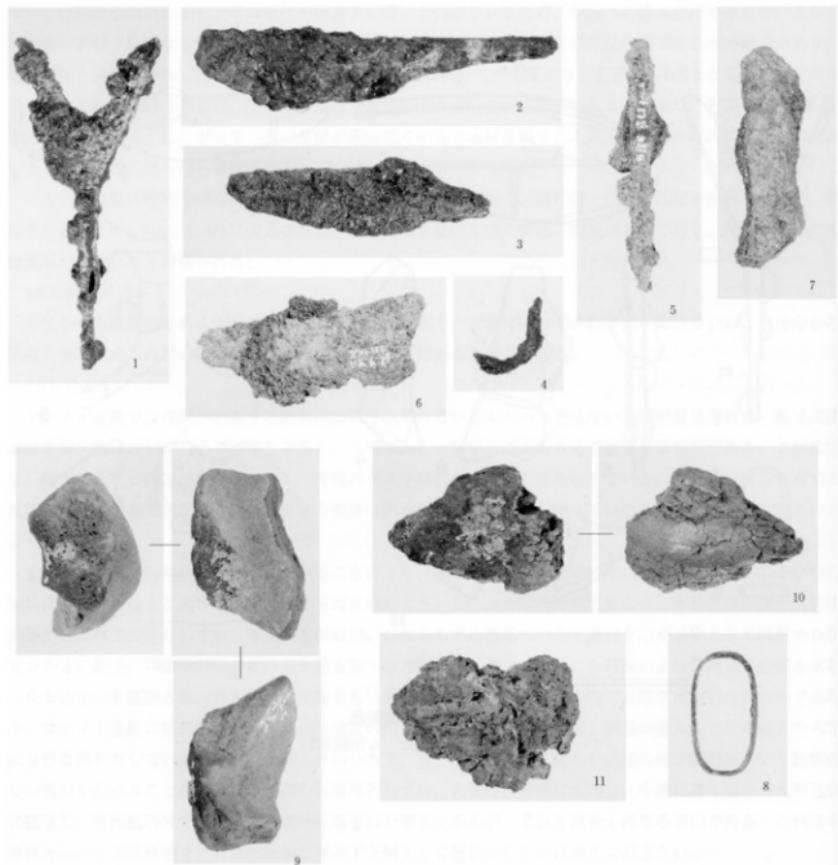
○ (原寸)

第89図



第90図 金属製品

1～7 鉄製品 8 青銅製品 9.10 蔵羽口 11 鉄滓



図版34 金属製品
(番号は第90図に対応する)

第6節 マツノト遺跡1991年調査で採集された脊椎動物遺体群

早稲田大学 樋 泉 岳 二

1. 資料と分析方法

ここでは1991年に行われた奄美大島笠利町マツノト遺跡の発掘調査で採集された脊椎動物遺体（骨類）の分析結果を報告する。この調査では、海岸砂丘中に形成された遺物包含層（腐食質暗色砂層）からヤコウガイをはじめとする膨大な量の貝殻のほか、多数の土器や骨類などが出土した。遺物包含層は上層（第1文化層）と下層（第2文化層）に分かれる。出土土器はいずれも兼久式を主体とし、下層では古い段階、上層では新しい段階のものがみられるという（中山1996）。上下の包含層の間には白砂層が介在しているが、ここからもかなりの量の遺物が出土しているようである。

骨類の採集方法は基本的に発掘現場での手による拾い上げ（ピックアップ）と推定されるが、一部ではフルイも併用されたらしく、小型（2 mm程度以上）の骨が多数混じる資料もみられた（第40表）。これらの資料を4 mmと2 mmのメッシュで再度フルイがけしたところ、2 mmメッシュを通過したのは細かい破碎骨片のみであったことから、使用されたフルイ目は2~3 mm程度と推定される。

採集された骨類の量は地区によってかなりの差があり、1区～5区や15区～16区周辺ではかなり多いが、他では比較的少ない。今回は時間の制約から、骨類の主体を占める魚類、ウミガメ類、イノシシ、イルカ・クジラ類については最も出土量の多い4区に限定して分析を行った。上記以外の少数要素（鳥類、ジュゴンなど）については、他の区も含めた全資料を総覧して抽出と同定を行った。出土層準については、「第1文化層」、「上層」、「白砂層」の記載がみられたが（他に層準不明の資料が多数ある）、ここでは「第1文化層」と「上層」は一括して扱った。「第2文化層」からの出土が明確な資料は4区ではなく、他の地区でもごくまれであった。

同定方法は現生標本との比較を原則とした。比較に用いた現生標本は、筆者の所蔵標本のほか、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏・小林園子氏、慶應義塾大学名島弥生氏の所蔵標本も参照させていただいた。魚骨の同定対象部位は、主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨の全資料（これらは未同定・同定不可の資料もすべてデータ化した）のほか、分類群の骨格の特徴に応じて他の部位（口蓋骨・舌顎骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・咽頭骨・擬鎖骨など）も適宜対象とした。ただし椎骨の同定に関しては基礎研究がきわめて不十分なため、特徴の明確なもののみを同定し、その他は「保留」とした。「同定不可」としたものは、破損などのため明らかに分類群の特定が困難と考えられるものである。

なお、分析に際しては名島弥生氏より全般にわたって多大なるご協力とご教示を賜った。銘記して厚く御礼申し上げる。

2. 分析結果

（1）骨類の概要

上記の通り骨の分布にはかなりムラがあったと推測されるが、今回分析対象とした4区では、5 m × 5 mの範囲から重量で約11kg、点数で魚類約4900点（同定対象部位のみ）、ウミガメ類122点、イノシシ43点、イルカ・クジラ類4点と、きわめて集中的な出土状況が確認された。内容は、第1文化層・上層・白砂層のいずれにおいても魚骨が圧倒的多数を占めており、次いでウミガメ類・イノシシが多く、イルカ・クジラ類の破片も普通である（第91図）。

（2）魚類

同定対象とした約4900点の資料のうち、科以下のレベルで分類群を特定できたものは約3970点、未同定・保

留資料は794点、同定不可資料は134点であった（第42表）。同定された分類群数は、軟骨魚類（板鰓類）1分類群、硬骨魚類（真骨類）29分類群である（第41表）。以下、同定結果に注釈を要する分類群について簡単に記載する。

サメ類 4区からは検出されなかつたため第42表には示していないが、5区・6区などからメジロザメ科型の大型の椎骨（椎体径25~30mm前後）が若干出土している。

トビウオ科 腹椎が1点確認された。側突起が前下方に伸びる点、腹面中央を薄く明確な隆起線が縦走する点などで、近縁のダツ科、サヨリ科と判別できる。

イットウダイ科 イットウダイ亜科に特徴的な顯著な棘をもつ前鰓蓋骨が確認されたほか、歯骨にはアカマツカサの現生標本に近似するものと、イットウダイ類に近似するものの2タイプがみられた。なおイットウダイ亜科の同定については名島氏より多くのご教示を得た。

ハタ科 前上顎骨・歯骨はマハタ属に一般的な形態のものと、スジアラに近似するものがみられた（スジアラに関する所見は名島氏からご教示を賜り、西本・小林氏の所蔵標本で確認させていただいた）。前者の歯帯は基本的に粗い絨毛状歯からなるのに対し、後者は頬側に大型歯列が1列あり、歯骨では先端歯と側歯帯の間に間隙がある。スジアラ型はいずれも比較的大型であるのに対し、マハタ属型は大小が混在しており、きわめて小型の個体もしばしばみられた。その他の部位はハタ科として一括したが、多くの部位で上記2タイプに対応すると思われる形態差がみられた。なお、第1椎骨以外の椎骨はフエキダイ科などとの判別が確実でないため「ハタ型」としたが、そのほとんどはハタ科と思われる。フルイが併用されたと思われる資料では小型のハタ型椎骨が普通である。

ギンガメアジ属 カスミアジの現生標本に近似する顎骨を暫定的にギンガメアジ属とした。いずれも大型である。なおアジ科とした尾椎もギンガメアジ類に類似するが、ごく小型である。

フエキダイ科 フエキダイ科の同定については、これまでヨコシマクロダイの前上顎骨・歯骨が種レベルで同定可能なことが確認されているが（上野1979）、その他の種類については基礎研究が十分でない（金子はハマエフキ・イソフエフキ・キツネフエフキを記載しているが（金子2005など）、同定の根拠は明示されていない）。今回の分析において筆者と名島氏が共同で所蔵現生標本の比較検討を行った結果（樋泉・名島、未発表）、暫定的な所見ではあるが、（1）前上顎骨によって種または属レベルの同定（ヨコシマクロダイ、ノコギリダイ、メイチダイ属、フエキダイ属の判別）ができる可能性が高いこと、また他のいくつかの部位でも属レベルで判別できる可能性があること、（2）フエキダイ属については、ハマフエフキなどアマミフエフキなどの間でかなり明確な形態差がみられるが、種レベルでの同定を行うにはさらに多数の現生標本の収集と比較骨学的の検討を要すること、などの見通しが得られた（詳細な記載は稿を改めて行う予定である）。以上の所見に基づいてフエキダイ科前上顎骨を検討した結果、ヨコシマクロダイ、ノコギリダイ、メイチダイ属、フエキダイ属と考えられる資料が確認された。大部分はメイチダイ属とフエキダイ属であり、フエキダイの大半はアマミフエフキなどに類するタイプ（以下「アマミフエフキ型」とする）であった。また、これまでに参照できた現生標本ではメイチダイ属の方骨、フエキダイ属の口蓋骨・方骨に特徴的な形態が認められたので、今回は暫定的に属レベルでの同定を行った。ヨコシマクロダイとノコギリダイの主上顎骨は下縁に鋸歯をもつ点が特徴で、さらにそれぞれ個性的な形態を示すことから容易に同定できる。その他の部位についてはフエキダイ科として一括したが、椎骨については第1椎骨と腹椎の一部を除き、タイ科などとの判別が確実でないことから、「タイ型」とした。

ベラ科 金子による咽頭骨のタイプ分類（金子1996、2005）に従った結果では「ベラ科B」が大半であった。椎骨はコブダイに近似するものが多く、シロクラベラに近似するものもわずかにみられた。他に「保留」とし

た椎骨にもベラ科の小型種が含まれている可能性がある。

ニザダイ科 ヒラニザの現生標本に類似するものと、ツマリテンギハギやサザナミトサカハギの現生標本に類似するものがみられたが、比較検討が不十分のためニザダイ科として一括した。前者は全般に小型で、とくに椎骨には椎体径 2~4 mm 程度の小型資料が多数みられた（資料 No. 2、No. 25、No. 28などフルイがけされたと思われる資料でニザダイ科椎骨が突出して多いのはこのためである）。後者はいずれも大型である。

オニオコゼ科？ オニオコゼの現生標本に類似する角骨・腹椎を「オニオコゼ科？」とした。「真骨類・未同定 A」とした前鰓蓋骨？も骨質などからみて同一種である可能性が高い。

今回は時間の制約から計測を行うことができなかつたが、主要種のサイズについて概要を記載すると、ハタ科（マハタ属型）とニザダイ科は上記のとおり大小各サイズの個体が混在しており、とくにニザダイ科は幼魚が多くみられた。これに対し、フエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、ハタ科（スジアラ型）、クロダイ属、モンガラカワハギ科などは比較的大型の個体が目立ち、小型魚（幼魚または小型種）はまれであった。この点については資料採集方法の影響もあるかもしれないが、ハタ科（マハタ属型）やニザダイ科とは傾向が異なることは確かと思われる。なお、フルイがけされたと思われる資料（No. 2、No. 25、No. 28など）では、小型のウツボ科、ダツ科、サヨリ科、アジ科、アイゴ属などの骨が少數ながらコンスタントに検出されている。またこれらの資料から多数検出されている「保留」椎骨も、大半は小型魚のものである。

出土魚類の量的な組成をみると（第47表、第92図）、フエフキダイ科を筆頭に、ブダイ科、ベラ科、ハタ科、クロダイ属が多く、フエフキダイ科、コショウダイ類、ニザダイ科、モンガラカワハギ科、ハリセンボン科、イットウダイ科も普通である。組成が多様で圧倒的な優占種がない点、フエフキダイ科はメイチダイ属とフエフキダイ属（アマミフエフキ型）が主体をなす点、ベラ科咽頭骨の大半が「ベラ科 B」で占められる点、イットウダイ科・コショウウダイ類が普通にみられる点などが特徴である。

出土魚類の生息環境をみると、サンゴ礁・岩礁性の魚が圧倒的に多い。それ以外では淡水の流入する水域に生息するクロダイ属がやや多く、サヨリ科・ダツ科・トビウオ科・ギンガメアジ属といった回遊魚もわずかにみられる（ただしトビウオ科以外は沿岸浅瀬まで来遊する）。

第1文化層・上層と白砂層の間で主要種の組成に大きな違いは認められないが、白砂層ではアナゴ科、ダツ科、サヨリ科、イットウダイ科、アイゴ属などの小型魚骨が少なく、フエフキダイ科、ブダイ科、ハタ科、ベラ科など比較的大型の魚種にやや偏る傾向がある。白砂層から出土する魚骨が大型魚に偏る傾向はマツノト遺跡2004年調査VI層（樋泉、印刷刷）や笠利町用見崎遺跡VII層（樋泉1998）でも確認されており（たしかに年代は兼久式期より古い）、漁撈パターンの違いを反映している可能性があるが、4区の「白砂層」ではフルイ採集による資料が少ないことから（第40表）、資料採集方法に起因している可能性も考えられる。

（3）両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類（第43~46表）

両生類ではカエル類がわずかに確認されたのみである。自然遺骸と思われる。

爬虫類ではウミガメ類がやや多い。種が判明したものはすべてアオウミガメで、若い個体から比較的大型の個体までが混在している。ほかにヘビ類の椎骨がみられたが、自然遺骸の可能性がある。

鳥類は破片骨がわずかに得られたのみである。いずれも種類を特定するに至らなかった。

陸獣類ではイノシシがやや多い。全資料の合計値に基づく最小個体数は成獣 3 個体（左下顎 M3）、幼獣 1 個体（左下顎骨）、計 4 個体である。他にネズミ亜科が 1 点得られたが、自然遺骸の可能性がある。

海獣類はイルカまたは小型のクジラ類と思われる小破片が普通である。また 4 区以外から少數ながらジュゴンが出土している。

3. 考察

以上から、本遺跡の狩猟・漁労活動（貝類採集を除く）は、きわめて活発な漁労（魚類利用）に加えウミガメ漁とイノシシ猟を主な構成要素としていたと推定される。漁労では、小型のニザダイ科などの多産から網漁の存在が示唆される一方、エフキダイ科やベラ科などは比較的大型の個体に偏る傾向がみられることから、大型魚を選択的に捕獲する漁法（たとえば釣漁や刺突漁など）も行われていた可能性が高い。イルカ・クジラ類についても、4区以外を含めコンスタントな出土がみられるようであり、ある程度計画的な漁が行われていた可能性がある。ジュゴンについては遺跡付近に餌場となる藻場の発達がみられないことから、そうした環境の発達する笠利湊方面からもたらされた可能性を考えるべきかもしれない。

こうした本遺跡の様相を周辺の同時代遺跡である用見崎遺跡（VI層）・安良川遺跡（樋泉1997・1998・2005）と比較すると、狩猟・漁労のパターンに大きな相違が認められる。すなわち、安良川遺跡では他の遺跡に比べ骨類の出土が極端に少なく、用見崎遺跡では水洗選別によって多数の魚骨が検出されているが、ウミガメ類やイノシシは少ない（ピックアップで採集された大型骨が未分析のため様相が不明確だが、本遺跡より少ないと確かと思われる）。また本遺跡と用見崎遺跡の魚類を比較すると、いずれもサンゴ礁・岩礁性の多様な魚種が混在している点では共通しているが、用見崎遺跡では小型魚が主体をなすのに対し、本遺跡では大型魚も多数漁獲されている。

全体として、本遺跡では漁労・狩猟の各種要素が描っているのに対し、用見崎遺跡では漁労のみが活発であり、その内容も小魚漁に偏っている。安良川遺跡では、骨類からみる限り狩猟・漁労活動の痕跡がきわめて希薄である。

以上のように、本地域では遺跡間で狩猟・漁労の様相に著しい違いがあり、本遺跡では狩猟・漁労の全般にわたる活動が行われているのに対し、他の遺跡での活動は部分的である。このことから推測すると、用見崎遺跡と安良川遺跡は限られた活動の場として形成されたものであるのに対し、本遺跡は各種活動が行われる拠点的な集落であった可能性も考えられる。

参考文献

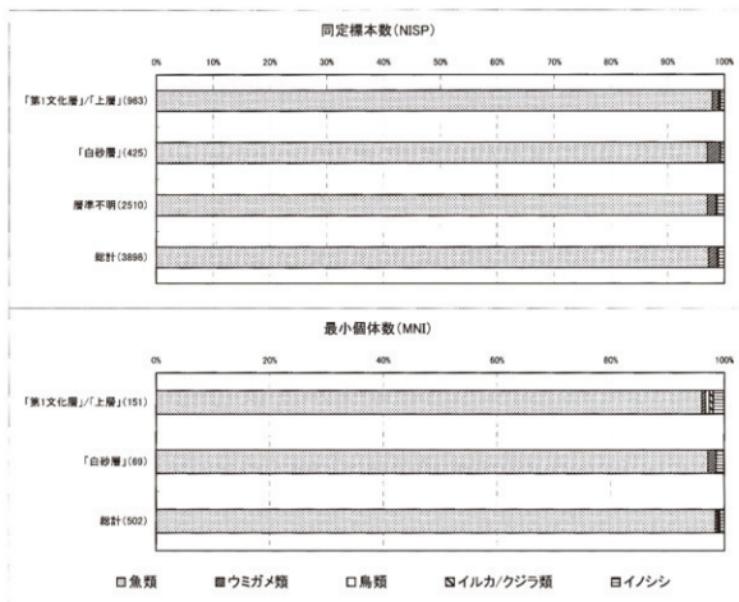
- 上野輝弥 1979「沖縄県伊江島ナガラ原西貝塚産魚類遺骸」伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書自然遺物篇 伊江村教育委員会
金子浩昌 1996「動物遺体（軟体動物を除く）」平敷屋トウバル遺跡 沖縄県教育委員会
金子浩昌 2005「脊椎動物遺体」、首里城-書院・鎮之間地区発掘調査報告書、沖縄県立埋蔵文化財センター
樋泉岳二 1997「用見崎出土の脊椎動物遺体（予報）」研究室活動報告32 熊本大学文学部考古学研究室
樋泉岳二 1998「用見崎遺跡出土の脊椎動物遺体（第二報）」考古学研究室報告第33集 熊本大学文学部考古学研究室
樋泉岳二 2005「安良川遺跡から出土した脊椎動物遺体群の概要」安良川遺跡 笠利町教育委員会
中山清美 1996「マツノト遺跡の発掘調査」奄美考古4

第40表 マツノト遺跡1991年調査の4区から採集された骨類資料の概要

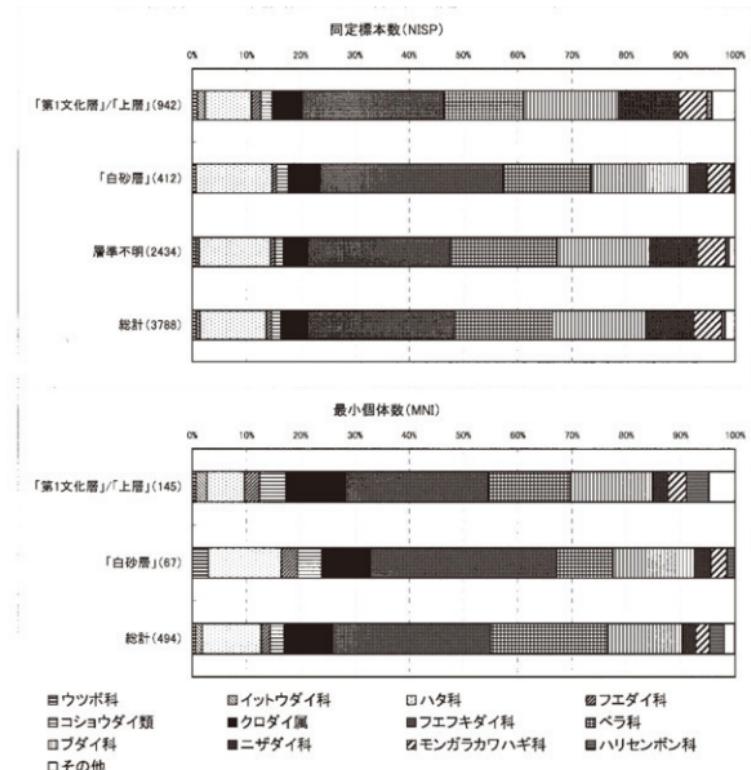
資料 No. (袋 No.)	層準の 記載	微小骨の 包含状況	推定される 資料採集方法	重量 g (風袋込み)	備考
1	第1文化層	2 mm 程度以上の小型骨若干	ピックアップ (+フルイ?)	849	
2	第1文化層	2 mm 程度以上の小型骨多數	ピックアップ+フルイ	1498	
3	白砂層	2 mm 程度以上の小型骨若干	ピックアップ (+フルイ?)	308	
4	白砂層	2 mm 程度以上の小型骨若干	ピックアップ (+フルイ?)	840	
5	第1文化層	微小骨なし	ピックアップ	124	
6	記載なし	微小骨なし	ピックアップ	388	
7	第1文化層	微小骨なし	ピックアップ	300	
8	上層	微小骨なし	ピックアップ	77	
9	記載なし	微小骨なし	ピックアップ	185	
10	白砂層	微小骨なし	ピックアップ	148	
11	記載なし	-	-	2	同定不可魚骨のみ
12	記載なし	-	-	2	同定不可魚骨のみ
13	上層	2 mm 程度以上の小型骨若干	ピックアップ (+フルイ?)	5	
14	白砂層	微小骨なし	ピックアップ	8	同定不可魚骨のみ
15	第1文化層	微小骨なし	ピックアップ	5	同定不可魚骨のみ
16	上層	-	-	-	骨出土せず
17	白砂層	微小骨なし	ピックアップ	3	
18	第1文化層	微小骨なし	ピックアップ	4	
19	上層	-	-	2	イノシシ切歯のみ
20	上層	-	-	-	骨出土せず
21	記載なし	-	-	1	同定不可魚骨のみ
22	上層	-	-	2	イノシシ骨片のみ
23	上層	-	-	-	骨出土せず
24	記載なし	2 mm 程度以上の小型骨多數	ピックアップ+フルイ	285	
25	記載なし	2 mm 程度以上の小型骨多數	ピックアップ+フルイ	1846	
26(1)	記載なし	2 mm 程度以上の小型骨若干	ピックアップ (+フルイ?)	1414	No. 26は2袋に分かれる
26(2)	記載なし	微小骨なし	ピックアップ		
27	記載なし	2 mm 程度以上の小型骨普通	ピックアップ+フルイ	995	
28	記載なし	2 mm 程度以上の小型骨多數	ピックアップ+フルイ	1589	
29	記載なし	微小骨なし	ピックアップ	163	
30	記載なし	微小骨なし	ピックアップ	80	
31	記載なし	-	-	5	フエキダイ科歯骨のみ
32	記載なし	-	-		ウミガメ1点のみ
			合計	11,128	

第41表 マツノト遺跡1991年調査で採集された脊椎動物遺体の種名一覧

軟骨魚綱（板鰓亜綱）	Chondrichthyes
サメ類（メジロザメ科？）	Carcharhinidae ?
硬骨魚綱（真骨上目）	Osteichthyes
ウツボ科	Muraenidae
アナゴ科	Congridae
ダツ科	Belonidae
サヨリ科	Hemiranphidae
トビウオ科	Exocoetidae
イットウダイ亜科	Helocentrinae
アカマツカサギ科？	Myripristinae ?
ハタ科（マハタ属型）	Serranidae cf. <i>Epinephelus</i>
ハタ科（スジアラ型）	Serranidae cf. <i>Plectropomus leopardus</i>
ギンガメアジ属	<i>Caranx</i>
フエダイ科	Lutjanidae
コショウダイ類	<i>Plectorhynchus / Diagramma pictum</i>
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i>
ヨコシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>
ノコギリダイ	<i>Gnathodentex aureolineatus</i>
メイチダイ属（複数種）	<i>Gymnoocranius spp.</i>
フエフキダイ属（ハマフエフキ型）	<i>Lethrinus cf. L. nebulosus</i>
フエフキダイ属（アマミフエフキ型）	<i>Lethrinus cf. L. miniatus</i>
ベラ科（「タキベラ」型）	<i>Labridae cf. "Bodianus perditio"</i>
ベラ科（B）	Labridae (type B)
ベラ科（その他）	Labridae (others)
イロブダイ属	<i>Bolbometopon</i>
アオブダイ属（複数種）	<i>Scarus spp.</i>
ニザダイ科（複数種）	Acanthuridae spp.
アイゴ属	<i>Siganus</i>
オニオコゼ科？	Synanceiidae ?
カレイ目	Pleuronectiformes
モンガラカワハギ科	Balistidae
ハリセンボン属	<i>Diodon</i>
両生綱	Amphibia
カエル類	Salientia
爬虫綱	Reptilia
ヘビ類	Ophidida
アオウミガメ	<i>Chelonia mydas</i>
鳥綱	Aves
鳥類（目不明）	Order indet.
哺乳綱	Mammalia
ヒト	<i>Homo sapiens</i>
ネズミ亜科	Murinae
イルカ／クジラ類	Cetacea
ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>



第91図 マツノト遺跡1991年調査4区から採集された脊椎動物遺体の組成（）はNISPまたはMNIの合計



第92図 マツノト遺跡1991年調査4区から採集された魚類遺体の組成（）はNISPまたはMNIの合計

第42-1表 マツト遭跡1991年調査4区から採集された魚類・ヘビ類標本の同定結果

第42-2表(つづき)

第42—3表(つづき)

第42—4表 (つづき)

骨番	資料 No.	No.6	No.9	No.24	No.25	No.26(1)	No.26(2)	No.27	No.28	No.29	No.30	No.31	合計	総計
ウツボ科	主上顎骨 歯骨												0/0	0/1
ウツボ科	角骨 方骨												0/0	3/0
ウツボ科	舌頭骨												0/0	1/0
ウツボ科	椎骨												1/0	1/0
アフコ科	頭椎			1									14	14
アフコ科	頸椎				2								2	2
サリ科	頭椎			1									3	5
トビウオ科	頭椎				2								6	8
タツノ科	頭椎							1					1	
イットウダクモ科?	前顎骨 歯骨												0	3
アカツカモ科?	歯骨												1/1	2/4
イットウダクモ科?	歯骨												0/0	0/2
イットウダクモ科?	主上顎骨												0/1	0/1
イットウダクモ科?	主上顎骨 前上顎骨												1/0	1/0
イットウダクモ科?	角骨												3/3	3/3
イットウダクモ科?	方骨												0/1	1/3
ハタ科 A	前上顎骨												0/0	0/2
ハタ科 A	歯骨												19/16	29/26
ハタ科 B	前上顎骨												36/23	51/37
ハタ科 B	歯骨												0/2	1/2
ハタ科 (鷹小鷹)	前上顎骨												2/3	3/3
ハタ科	主上顎骨												2/0	2/0
ハタ科	角骨												2/0	2/0
ハタ科	方骨												21/19	31/30
ハタ科	前顎骨												15/12	22/32
ハタ科	歯骨												17/22	24/32
ハタ科	第1恵骨												21/28	24/33
ハタ科	第1恵骨												25/19	37/29
ハタ科	尾椎												6	1
ギンガメアジ科	尾椎												15	17
ギンガメアジ科	主上顎骨												0/0	0/1
ギンガメアジ科	前上顎骨												0/0	0/1
ギンガメアジ科	歯骨												0/0	0/1
アシ科	尾椎												1/0	1/0
ワエダ科	主上顎骨												3/2	4/3
ワエダ科	前上顎骨												2/3	8/5
ワエダ科	歯骨												3/1	4/4
ワエダ科	方骨												4/0	6/1
コショウダクモ科	主上顎骨												0/1	1/2
コショウダクモ科	前上顎骨												4/3	5/4
コショウダクモ科	歯骨												8/3	13/5
コショウダクモ科	角骨												1/0	7/8
コショウダクモ科	方骨												1/0	1/0
コショウダクモ科	前顎骨												3/4	5/5
コショウダクモ科	尾椎												1/0	1/0
クロダイ科	主上顎骨												1/5	2/8
クロダイ科	前上顎骨												3/5	8/5
		2	/3										26/22	44/42

第42-5表(つづき)

属	種目 No.	箇所 不用										合計
		No.6	No.9	No.24	No.25	No.26(1)	No.26(2)	No.27	No.28	No.29	No.30	
クロダイ属	前骨 角骨 方骨 口蓋骨	/1	2/1	5/2	4/5	5/4	3/3	7/1	7/2	2/1	2/1	23/20
クロダイ属	主上顎骨 前上顎骨 橋骨			1/1		1/1		1/1		1/1		3/3
ヨコシマクロダイ	ヨコシマクロダイ										0/0	5/4
ヨコシマクロダイ	ヨコシマクロダイ										1/1	1/1
ノコギリザメ?	ノコギリザメ?										1/1	2/1
スズメガ属	スズメガ属	1/1	1/1	1/2	9/8	1/1	1/1	6/5	8/5	1/1	1/1	1/0
スズメガ属	スズメガ属				8/7			8/4	5/5			1/0
ワカツキアカニ属	ワカツキアカニ属	1/1	1/1	1/1	16/19	2/5	5/6	9/10	10/6	3/4	1/1	28/19
ワカツキアカニ属	ワカツキアカニ属											1/3
フエフキダイ属(判明なし)	フエフキダイ属(判明なし)	1/1										0/0
フエフキダイ属	前上顎骨											1/0
フエフキダイ属	方骨	2/1	2/1	19/11	3/3	1/2	5/8	9/9	7/2	1/1	1/1	39/36
フエフキダイ属	主上顎骨			15/11	1/1	1/1	4/5	4/5	3/2	2/1	2/1	57/43
フエフキダイ属	前上顎骨			11/10	3/2	5/2	4/5	5/5	2/1	2/1	2/1	31/30
フエフキダイ科	前上顎骨			3/2	1/1	1/1	5/8	5/8	1/1	1/1	1/1	45/51
フエフキダイ科	前上顎骨			19/24	3/6	5/7	9/16	16/21	1/2	1/2	1/2	5/5
フエフキダイ科	前上顎骨	1/1	3/4	13/21	2/1	1/2	15/6	9/14	3/3	3/3	3/3	111/125
フエフキダイ科	前上顎骨											47/48
フエフキダイ科	第1椎骨											81/65
タツノイ属	尾椎											2/1
ペラ科(B)	上頸頭骨	1/7	3	2/3	8/12	4/3	3/2	2/3	5/4	2/1	2/1	16/16
ペラ科(B)	下頸頭骨			2/2	16	1/1	18	15	10	3	1/1	27/27
ペラ科(B)	(タキベラ属)											39/40
ペラ科(B)	(タキベラ属)											101/101
ペラ科(その他)	上頸頭骨											1/0
ペラ科(その他)	下頸頭骨											1/1
ペラ科	上頸頭骨	1/1	1/1	1/1	1/1	1/1	2/1	2/1	2/2	2/1	2/1	4/4
ペラ科	下頸頭骨											9/9
ペラ科	上頸頭骨											64/73
ペラ科	下頸頭骨											40/37
ペラ科	方骨											56/57
ペラ科	第1椎骨											10/11
ペラ科	尾椎											16/13
ペラ科	尾椎											22/21
ペラ科	尾椎											1/1
ペラ科	尾椎											2/2
ペラ科	尾椎											107/107
ペラ科	尾椎											48/48
イロブタ属	前骨	2/3	1/3	2/3	7/4	1/3	2/3	2/3	4/6	4/1	2/1	0/0
イロブタ属	上頸頭骨	2/2	3	2/2	6	1/1	9	2/2	8	2/1	2/1	27/32
イロブタ属	下頸頭骨					1/1	4/9	4/2	8/8	4/3	2/1	45/45
イロブタ属	上頸頭骨	4/3	3/2	1/1	11/5	1/1	3/2	6/3	9/10	5/2	2/2	33/33
イロブタ属	下頸頭骨											56/56
ブダイ科	上頸頭骨											39/34
ブダイ科	方骨											67/65
ブダイ科	第1椎骨											11/11
ブダイ科	尾椎											17/17
ブダイ科	尾椎											9/9
ブダイ科	尾椎											17/12
ブダイ科	尾椎											4/4
二サザイ科	尾椎											60/60
二サザイ科	上頸頭骨											133/133

第42—6表(つづき)

第43表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集されたウミガメ・イルカ／クジラ類遺体の同定結果
左右のある部位は左／右で示した。fr：破片

層準	「第1文化層」/ 「上層」	「白砂層」	層準不明	合計
アオウミガメ 下顎骨			1/1	1/1
アオウミガメ? 中腹板	1/		1/	2/
			1/	1/
			1/	1/
ウミガメ類 剣状腹板				
前烏口骨			1/1	1/1
上腕骨			1/1	1/1
橈骨	1/			1/
尺骨	1/			1/
中手骨?			1	1
指骨		5	2	7
脛骨?	/1	1/		1/1
肋骨板	fr 1	fr 1	fr 9	fr 11
臀骨板	1			1
縁骨板	1	2	12	15
背甲骨板	fr 1			fr 1
上腹板			1/	1/
腹甲骨板	fr 2	fr 1	fr 6	fr 9
甲骨板(背腹不明)	fr 1			1
イルカ／クジラ類 肋骨破片	fr 1		fr 1	fr 2
部位不明破片	fr 1		fr 1	fr 2

ウミガメ類は同一骨と思われる複数破片は接合しない場合でも1とカウントした。

第44表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集されたイノシシ遺体の同定結果
左右のある部位は左／右で示した。顎骨・臼歯の詳細は第44表を参照。

層準	「第1文化層」/ 「上層」	「白砂層」	層準不明	合計
上顎骨	/1			/1
上顎 I1			2/	2/
下顎骨	1/		2/	3/
下顎 II			1/	1/
下顎 I2	2/			2/
F顎 C			/1	/1
下顎 P4			1/	1/
下顎 M1	/1			/1
下顎 M2			2/1	2/1
下顎 M3			3/2	3/2
下顎角			1/	1/
環椎			1	1
肋骨	破片	1		1
肩甲骨	関節部	/1	3/1	3/2
上腕骨	遠位端		/1	/1
	骨幹	1/	/2	1/2
橈骨	遠位端		1/	1/
尺骨	滑車切痕		/1	/1
第4中手骨	完存		/1	/1
寛骨	寛骨臼		1/	1/
脛骨	遠位端	/1	1/1	1/2
	骨幹	1/	/1	1/1
腓骨	完存		/1	/1
基節骨	完存		1	1

第45表 マツノト遺跡1991年調査4区出土のイノシシ頸骨・臼歯の記載

標本No.	袋No.	層準	部位	左右	記載	()前出中, < >未萌出, ×脱落
1	1	第1文化層	下顎骨	L	幼獣, [i ~ c ×, (m1)m2 m3 < M1>] 下顎角～下顎枝を欠損.	
2	1	第1文化層	下顎< M1 >	R	未萌出, No.1と同一個体?	
3	7	第1文化層	上顎骨	R	[P4 M1 × M2]	
4	9	—	下顎骨	L	[P2 ~ P4 ×] 全歯脱落	
5	9	—	下顎 P4	L	No.4とは別個体? , No.6~8と同一個体?	
6	9	—	下顎 M2	L		
7	9	—	下顎 (M3)	L	萌出中, No.8と同一個体	
8	9	—	下顎 (M3)	R	萌出中	
9	26	—	下顎骨	L	[P2 ~ P3 ×] 全歯脱落	
10	26	—	下顎 M1	?	老獣, 咬耗進行, エナメル質消失, 以下 No.14まで同一個体.	
11	26	—	下顎 M2	L	老獣, 咬耗進行, エナメル質ほぼ消失	
12	26	—	下顎 M3	L	老獣, 咬耗進行, エナメル質ほぼ消失	
13	26	—	下顎 M2	R	老獣, 咬耗進行, エナメル質ほぼ消失	
14	26	—	下顎 M3	R	老獣, 咬耗進行, エナメル質ほぼ消失	
15	26	—	下顎 C	R	♀, 老獣, No.10~14と同一個体か	
16	26	—	下顎 M3	L	No.10~15とは別個体.	

標本 No. は記載のための便宜的なもの

第46表 マツノト遺跡1991年調査で採集された両生類・鳥類・哺乳類（イノシシ以外）の同定結果

区	袋No.	層準	分類群	部位	位置	左右	数	備考
4	2	第1文化層	カエル類	尾椎			1	
4	2	第1文化層	鳥類・同定不可	尺骨	骨幹		1	
4	25	—	鳥類・同定不可	胸骨			1	
3	1	第1文化層	鳥類?・同定不可	不明長骨	骨幹		1	
5	5	白砂層	ネズミ亜科	下顎骨	[M1]	L	1	大型, M1L = 4.31
5	15	—	ジュゴン	上腕骨	完存	R	1	
5	20	上層	ジュゴン	肋骨	近位端		1	
2	4	上層	ヒト	切歯			1	
31	4	—	ヒト	臼歯			1	

第47表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集された脊椎動物遺体の組成
カエル・ヘビ類を除く。MNIの総計は層準不明を含めた全資料の合計値に基づいて算出したもの

	同定標本数 (NISP)				最小個体数 (MNI)		
	「第1文化層」 ／「上層」	「白砂層」	層準不明	総計	「第1文化層」 ／「上層」	「白砂層」	総計 *
ウツボ科	9	3	16	28	1	2	3
アナゴ科	2	0	3	5	1	0	1
ダツ科	5	0	0	5	1	0	1
サヨリ科	2	0	6	8	1	0	1
トビウオ科	0	0	1	1	0	0	1
ダツ目	3	0	0	3	—	—	—
イットウダイ科	13	0	13	26	3	0	6
ハタ科	81	58	323	462	10	9	54
ギンガメアジ属	3	0	5	8	1	0	1
フエダイ科	16	3	19	38	4	2	8
コショウウダイ類	20	9	37	66	7	3	13
クロダイ属	51	24	108	183	16	6	44
ヨコシマクロダイ	2	0	4	6	1	0	2
他のエフキダイ科	246	139	642	1027	38	23	144
タイ型	13	1	2	16	—	—	—
ベラ科	140	67	481	688	22	7	106
ブダイ科	164	74	413	651	22	10	68
ニザダイ科	104	14	213	331	4	2	12
アイゴ属	9	0	5	14	1	0	1
オニオコゼ科?	0	0	2	2	0	0	1
カレイ目	1	0	0	1	1	0	1
モンガラカワハギ科	49	18	127	194	5	2	13
ハリセンボン科	9	2	14	25	6	1	13
真骨類・未同定 A	53	19	94	166	—	—	—
真骨類・保留	182	28	373	583	—	—	—
ウミガメ類	11	10	40	61	1	1	2
鳥類	1	0	1	2	1	0	1
イルカ／クジラ類	2	0	2	4	1	0	1
イノシシ	7	3	33	43	3	1	4

第Ⅳ章 平成16年度層位確認調査の成果

第1節 調査の概要

発掘調査は笠利町教育委員会が主催し、これに並行して科学研究費研究による自然科学等諸調査（本研究）を実施した。調査は、2004年10月25日から10月31日の期間でおこなった。発掘調査では中村友昭がフィールドマスターを務めた。

調査参加者は以下の通りである。なお、調査参加者の所属は2004年当時のものである。

調査参加者

発掘調査：中山清美（笠利町教育委員会）、中村友昭、南健太郎、森幸一郎（以上熊本大学大学院修士1年）、仙波靖子、西山絵里子、牧野幸子（以上熊本大学文学部考古学研究室3年）、清水恒志、高平愛子、津田勇希（以上熊本大学文学部考古学研究室2年）、石井龍太（東京大学大学院）、名島弥生（慶應義塾大学大学院）

自然科学等諸調査：木下尚子、杉井健、大坪志子（以上熊本大学文学部）、岸本義彦（沖縄県埋蔵文化財センター）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、佐藤幸一（北里大学）、新里亮人（伊仙町教育委員会）、樋泉岳二（早稲田大学）、中村恩（北谷町教育委員会）、西野望（矢掛町教育委員会）、松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）

第2節 調査の目的と方法

マツノト遺跡は1991年に笠利町教育委員会によって調査がおこなわれている。この調査は緊急発掘調査であったため、層序の記録が必ずしも十分ではなかった。したがって、今回の調査では遺跡の層序を確認し、前回調査との整合をおこなう。これが第一の目的である。

第二の目的は、遺物包含層の確認である。前回調査では、無遺物層である白砂層を挟んで第1文化層と第2文化層という二つの遺物包含層が検出された。両層は出土遺物の様相を明確に異にした、新旧2時期の文化層である。今回の調査でも、この二つの包含層を検出しその遺物の様相を再確認することを目指した。

マツノト遺跡は考古学的な価値の高い遺跡であるにもかかわらず、緊急調査によりその多くを消失し、現在わずかにその一角を残すにすぎない。今回の調査では遺跡を残すことを主眼に、すでに崖面として現れている部分を清掃して層位関係を確認し、面的には最小限度の発掘をするにとどめた。具体的には以下の作業をおこなった。

1. 層の堆積状況を確認し、断面図を作成する。
2. 調査区を最小限度に設定し、遺物の出土位置を記録する。

まず断面状況確認のために、遺跡の方角にあわせ北区、東区、南区の3区を設定した（第94図）。北区は、近くを流れる喜子川によって砂丘が削られ、崖面をなす地区である。東区は、海岸に沿って配水管を埋設したときの低い崖がそのままのこっている。当初この崖を2~3mおきに清掃したが、1991年調査で検出した第2文化層を確認できなかった。そこで、壁面を全面的に清掃し、一部重機を使用して深堀し、層序の確認をおこなった。南区は、1991年調査区に最も近い位置にあり、緩やかな溝をなしていた。東区同様、重機によって掘り下げ、層序を確認した。

一方、これに並行して、遺跡の平面図作成と発掘調査区を設定した。設定した調査区は2箇所で、南区東端に近接する2.0×1.0mの調査区（Mトレント）と東区北端に近接する1.0×0.5mの調査区（Kトレント）である。両調査区とも、層位を確認しながら掘り下げをすすめ、出土遺物はその位置を平面図に記録した。Mトレ

ンチは、遺物の広がりにともない、漸次東側へ拡張した。

本調査では、遺跡の形成過程を多角的に解明するために、脊椎動物遺存体、貝類遺存体、植物遺体、堆積学、根成孔隙についての調査も並行して実施した。これらについては、定量的な分析のために、複数個所で土壤サンプリングを行った。

第3節 層序（第95図）

基本層序を以下に説明する。

表土 黄褐色混砂土層。全調査区で検出。Mトレンチでは、包含物や根の繁茂状況により4層に区分した（表土（1）～表土（4））。

I層 褐色砂層。遺物包含層。全調査区で検出。多数の貝殻や土器を包含。1991年調査の第1文化層に相当。
ただし、Mトレンチでは、西半部にかけてI層が北側へ広がる。

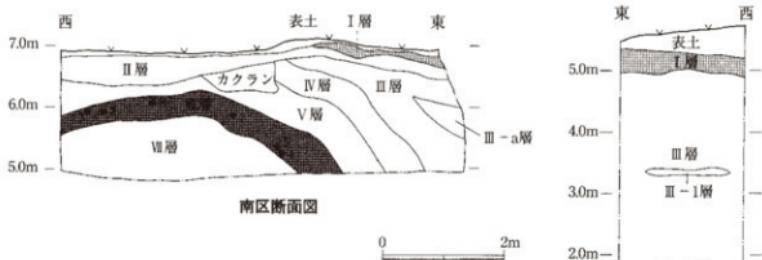
II層 黄橙色砂層。無遺物層。よく締まる。北区を除く全調査区で検出。Mトレンチからはその上部に少量の



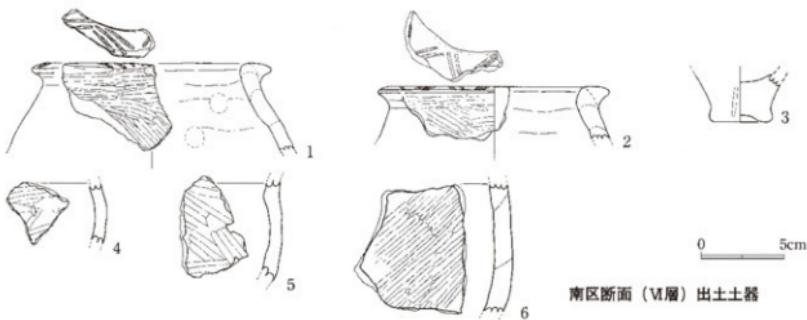
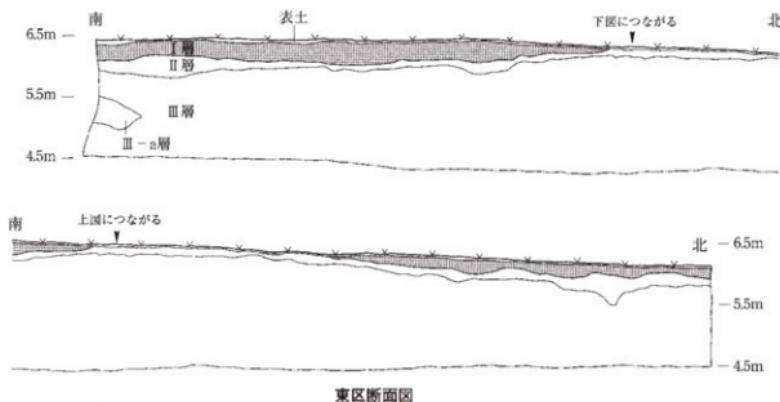
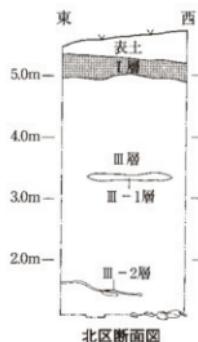
第93図 マツノト遺跡の位置



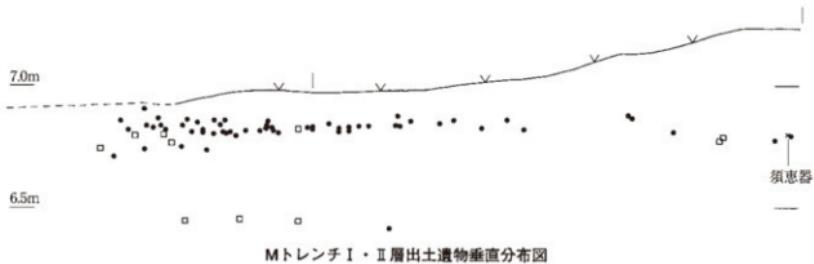
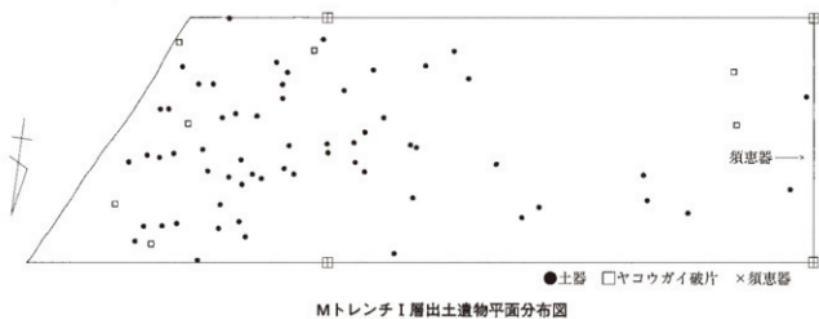
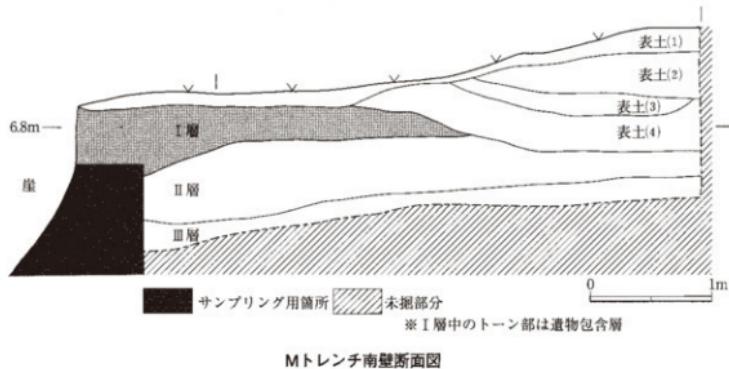
第94図 マツノト遺跡調査区設定図



※1 トーン部は遺物包含層
2 南区断面図中の番号は下の遺物実測図番号に対応



第95図 マツノト遺跡2004断面図及び出土土器実測図



第96図 M Trench断面図および出土遺物分布図

遺物が出土。

Ⅲ層 黄橙色砂層。無遺物層。縮まりなし。全調査区で検出。粘質や土色の異なるブロックを、北区で2層（Ⅲ-1層、Ⅲ-2層）、南区と東区で1層（Ⅲ-a層）確認した。

IV層 黄橙色砂層。無遺物層。よく縮まる。南区でのみ検出。

V層 黄橙色砂層。無遺物層。縮まりなし。南区でのみ検出。褐灰色の小石礫を含む。

VI層 浅黄橙色砂層。遺物包含層。南区でのみ検出。やや縮まる。褐灰色の小石礫を多く含む。土器片を断面状で検出。1991年調査の第2文化層にそのまま相当するかどうか検討が必要。

VII層 浅黄橙色砂層。無遺物層。縮まりなし。南区でのみ検出。

I層からⅢ層は調査区全体に広がっているが、IV層以下の層は南区でのみ認められた。これらは海側（東側）へゆるやかに傾斜している。

第4節 遺物出土状況（第96図）

各調査区ともI層で遺物が出土している。Mトレーナーでは、遺物は調査区東側を中心に分布しており、その南側には少ない（第96図）。南区の断面では、VI層において層の東側への傾斜にともなって遺物が出土した。

I層では土器片171点、ヤコウガイ製貝匙3点、須恵器1点（胸部破片）、鉄器1点（形状不明）が出土し、VI層では土器片6点が出土した。

第5節 出土遺物（第97図）

I層出土の土器は、兼久式土器が主体である。横位に刻目突帯を一条めぐらすもの（3）、それに沈線を施文したもの（4・5）が該当する。また、縦方向に粘土を貼付したもの（6・7）など、兼久式土器の範疇から外れる土器も出土している。底部は、外底面に木葉痕を有したくびれ平底（9・10）が主体である。なお、I層から須恵器の胸部破片1点が出土し、これが1991年調査で出土したものと接合した。

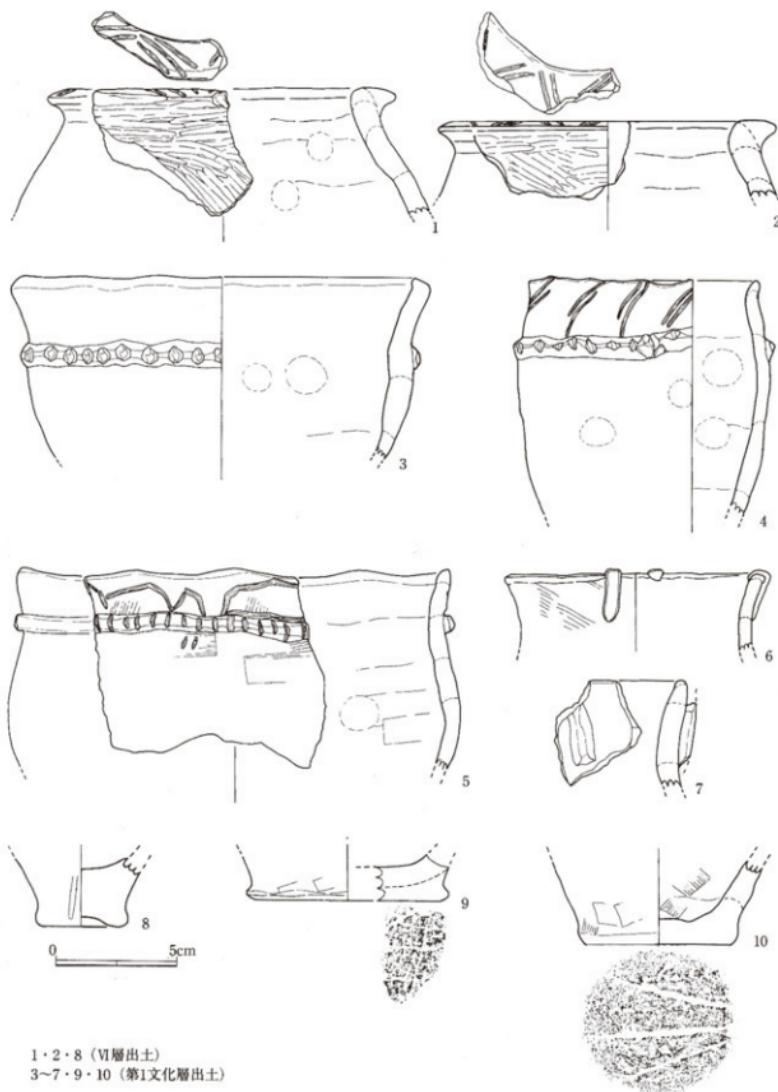
南区VI層の断面からは、I層とは様相の異なる土器が出土した（第97図の1・2・8、第95図の1～6）。これらはすべて外器面が丁寧に磨かれて器面に光沢をもつ。口縁部は逆L字状に外反し、口唇部外面に2～3条を1単位とした沈線を施文し、底部はやや上げ底である。これらが同一個体である証拠はないが、共通性のきわめて高い一群であることは確実である。

第6節 小結

マツノト遺跡の北端に残する遺跡を、その北側、東側、南側の3箇所において層序と包含層の状況を確認した。その結果、遺物を含まない白砂層を挟んで上下に2層の文化層を確認することができた。上の文化層は、遺跡の全面に広がっているが、下の文化層は南側でのみ確認され、北への連続は認められなかった。また上の文化層に遺物が豊富に包含されている状況を、一部で確認した。

1991年調査でも、無遺物層を含む上下2枚の文化層が検出されている（第1文化層と第2文化層）。このうち、第1文化層は兼久式土器を主体とする層であり、第2文化層はそれを遡る時期の層である。今回調査したI層は、兼久式土器を主体にする層である。また出土した須恵器片が前回調査の第1文化層において出土したものと接合している。以上から、本調査のI層と前回調査の第1文化層は同一文化層とみていい。

第2文化層についてはどうだろう。我々は当初、南区の断面上で検出したVI層が前回調査検出の第2文化層に対応するであろうと予測していた。しかし、断面上で検出した土器片の特徴（口縁部形態や外器面調整）は、1991年の第2文化層出土土器のそれとは明らかに異なっている。したがってVI層と第2文化層はそのまま対応



1・2・8 (VI層出土)
3~7・9・10 (第1文化層出土)

第97図 主な出土遺物実測図

しているとは決めがたい。つまり、第2文化層の広がりが今回の調査区まで続いておらず、VI層も前回の調査区を覆っていなかったことが予測される。このことは、1991年調査時の写真（本報告書図版35）によっても確認できる。これらによると、マツノト遺跡第1文化層の下には複数のうすいクロスナ層が認められ、またこれらの現われ方は断続的だからである。

以上から、マツノト遺跡には、遺跡の全面にひろがる兼久式土器を主体とする文化層（1991年調査・2004年調査の第1文化層）と、これより明らかに古い2時期の文化層（1991年調査の第2文化層と2004年調査のVI層）の存在したことが、今回の調査で明らかになった。

謝辞：本章をまとめるにあたり、名島弥生氏（慶應義塾大学）、中山清美氏をはじめとする笠利町歴史民俗資料館の方々、森幸一郎氏を中心とする発掘調査に携わった熊本大学考古学研究室の学生諸氏に多大なご助勢を賜った。末筆ながら記して謝意をあらわす。



南区層序



調査参加者

第V章 総括

1. 総括

兼久式土器を主体として出土する当遺跡は一部分を残し、その大半は調査終了後砂取り工事によって消滅している。調査によって大量に出土した遺物の整理、分析は各章ごとに調査者が報告を行っているため、その成果をかいつまんでまとめてみたい。

遺跡と砂丘形成については第II章第2節「自然的環境」において奄美諸島に確認されている遺跡の52%が砂丘上に形成されている事実と砂丘形成を寒冷化現象による自然現象からの視点で遺跡を捉えている。このような視点は考古学に自然現象を取り入れ、遺物を含むクロスナ層と出土遺物による編年等の新たな試みとして「奄美考古歴史年表」を作成している。年表は海面変化と洪積世低地の地形変化が時期区分され、それに奄美・沖縄諸島および種子島・屋久島、鹿児島などの代表的な遺跡が挙げられている。これまで調査された遺跡の¹⁴C測定値と出土遺物から時代区分を行い、旧石器時代から江戸時代まで紹介を行った。今後砂丘形成と遺跡の関係は遺跡の柱状図の作成を行い、他遺跡と比較をおこなうことによって土器型式と合わせた編年作業も可能である。

出土遺物の土器については出土区別のデーターと層位を示し土器の分類を行っている。

兼久式土器はこれまで兼久式土器の範疇（スセン當式土器、沈線文土器、無文土器等）とされていた土器のほかに他の型式と伴うことや、上下の層序をもつ遺跡からの出土が少なかったことから時間軸を示すことが出来なかつた。しかし、近年になり他型式と前後関係を示す資料や開元通宝、貝符などとの共伴関係や¹⁴C年代測定値の蓄積などから時期的な位置づけの根拠が得られるようになっている。これに従い兼久式土器は奄美地域固有の在地土器であり、ヤコウガイの大量消費など特徴的な文化が存在したことも理解されるようになる。

本報告資料から兼久式土器の変遷を整理し、時間のものさしを作ることは奄美考古学にとって重要な課題と言える。本遺跡の土器分類はこうした時間のものさしを作るうえで欠かせないデーターと事実報告をおこなうことに主眼を置いて作成した（但し、分類を行った以外の各1点々の土器・魚骨・貝製品等の出土別データー表はかなりのページ数になったため止む無く割愛せざるを得なくなつた）。

マツノト遺跡出土土器は1類兼久式土器、2類兼久式土器以外の土器、3類外来土器、4類注口土器、5類須恵器に分けて分類を行っている。1類では形式、型式、様式の研究方法を示しA、B、Cの3タイプに分類を行い兼久様式としてまとめ組列の層位的検証をおこなっている。そのためには出土遺物全部の基礎資料データーとその特徴を示し、その中から情報を引き出す方法を行つた。形式分類から壺形土器と壺形土器に大別され、文様による型式分類から3段階16種までの再分類を行つた。

これまで兼久式土器が第1文下層から急に増加するデーターは資料整理を進める中で一括資料として捉えられ大きな時間差を示さないことも考えられる。このことは河口貞徳が面繩第3貝塚の調査でも「一括でまとまって出土している」と報告しているのと共通する。

兼久式土器の大枠型式分類Aは横突帯に刻目の有無と沈線の有無など横突帯を主体に分類している。BはAと同様に縦、横、斜などA以外の突帯文を主体に刻目の有無、沈線の有無などに再分類をおこなっている。Cは無文土器で形態的に口縁部の直口、外反で分類を行つてある。無文土器は兼久式土器としては扱っていないが並行期に共存する代表的資料として示している。

次に系統的な時間軸の考察は先のA、B、Cの兼久式土器と伴つて出土している外耳土器、沈線文土器などがあげられる。この資料はマツノト遺跡土器分類2類に入れている。兼久式土器の前段階から沈線文土器、突

帶文土器、無文土器などは縄文、弥生時代からの系統的な特徴も考えられる。同様なことを奄美、沖縄諸島における弥生時代並行期の土器編年が沈線文土器系統であることも考えられる（堂込1998）。このように兼久式土器の型式分類をデーターで示して行ったことは次の兼久式土器編年研究の材料を揃えたということになる。

1類兼久式土器と共に伴する2類土器の外耳、弧状、沈線、無文土器等は兼久式土器の編年を考察するうえで注目される資料である。沈線文資料の中には外面に沈線を有し、弥生土器に共通する特徴から古い要素を含んでいると思われる。これに対し外耳状、弧状突帯文を有する土器は弥生土器に共通性がなく、新しい要素を持っていると考えられる。のことから弥生土器よりは新しく、兼久式土器より古いと考えられる。それは兼久式土器以前に貼付文土器があり、兼久式土器期に貼付刻目文土器が登場するものと考えられる。

兼久式土器の登場する前の土器として沈線文土器、スセン當式土器が取り上げられている。この土器は1982年に沖永良部知名町スセン當貝塚から発見され古墳時代並行期の土器として位置づけられている。兼久式土器編年を行う時間差を求める前段階の土器としては欠かせない資料のひとつである。

3類土器の外来系土器には南九州で製作された成川式土器の壺と壺がある。これらの資料は表探資料である。当初兼久式土器にこうした弥生系の土器が混入しているため兼久式土器の古いタイプは弥生時代相当期に求められるのではないかとされた原因をなしていた。1991年の発掘調査資料からの出土はなかったが2004年の層位確認調査において南区断面第VI層から弥生系土器が出土している。兼久式土器を主体とする遺物包含層が砂丘全体から出土しており、沈線文土器、スセン當等を出土する遺物包含層、そして弥生系を出土する遺物包含層は砂丘形成とあわせて部分的に存在していることが判明した。第1文化層から出土する鉄、須恵器、土師器等は第1文化層上層であることからマツノト遺跡の砂丘形成に合わせて4文化層が存在していたことが考えられる。

外来土器には歴史時代の土師器、碗、壺も出土している。これらの出土遺物について大宰府では国分寺や国府から出土する資料の製作技法などの違いから「官」と「民」による使い分けも示唆されていることを太宰府市の中島恒二郎氏から教示して頂いた。マツノト遺跡出土の碗についても製作技法の特徴的観察も行われており、こうした九州系の資料出土の影響がこの時期に現われ始めていることがどのような意味を持つのかその時代的背景も今後注目される。

貝については貝製品とヤコウガイに分けて分類を行った。これは貝製品の貝種と用途、装飾品に分けて分類を行い、これからあらゆる視点で貝分類を行う基礎的データー表の作成をした。これまで奄美諸島と沖縄諸島から出土するゴホウラや大型イモガイは貝符や貝輪の素材になるが本遺跡ではアンボイナが代用として使われているという結果を得ている。貝製品を多数出土するということで奄美諸島と沖縄諸島は共通しているが貝の種類や用い方が違うことなど分類から考察されている。サンゴ製品についても貝製品と同様な用途が見られるなど図とデーターでも具体的に示している。

ヤコウガイについてはマツノト遺跡出土すべてのヤコウガイ破損状況をデーター化し、製品製作、交易品としての利用と食料として採集が行われたことを求めている。その結果ヤコウガイすべてが交易品や製品製作に使われるのではなく食料として小さい貝も採集していることがわかった。その数は全体の5割に比熱痕があり、ヤコウガイの食料残滓をも含めた検討がなされている。現存するヤコウガイの破損状況から考えられるのはヤコウガイのつぼ焼きが手っ取り早く考えられてしまう。このことは実際に採集したヤコウガイの比熱痕、破損状況のとおりに貝口を上にした豪快なヤコウガイのつぼ焼きの再現を試みた。その結果、殻の剥離や破損状況も遺跡から出土した比熱痕のある資料と一致する結果を得ている。身もやわらかく適当な塩分と貝汁の調合がとても贅沢な味であった。

螺鈿の材料としては大型の貝が用いられていることも紹介しており、そのことはマツノト遺跡においてヤコ

ウガイの選別等が行われていたことも考慮され、殻のまま製品として集積する交易センター的な役割も考えられよう。ヤコウガイの出土状況や小型、中型、大型の採集等についても含めて用見崎遺跡や安良川遺跡との違いなど今後さらなる検討が必要とされる。

マツノト遺跡の金属製品については111点の出土があり、九州本土との関係を示す資料と沖縄グスク時代の刀子の特徴を示す資料が出土している。櫛羽口等の出土から鉄器生産も行われている。素材の受給、製品の搬入など鉄の道具の入手に多様な術を有していることも外部との交易を証明している。鉄製品には奄美諸島では類例のない雁又式鉄鐵や刀の銅製リングなども出土している。前述したようにここでも武器と棒状鉄製品など北と南の特徴を示す資料が出土していることが注目される。

脊椎動物遺体群の分析は多数の魚骨4900点、ウミガメ類122点、イノシシ43点、イルカ・クジラ類4点など外洋の遺体が目立つのが特徴とされている。これらのデーターから活発な漁労に加えウミガメ漁とイノシシ猟を主な構成要素としていたことなどが推定されている。貝製品、サンゴ製品、鉄製釣針等の出土状況からも大型漁を選択的に捕獲する条件と脊椎遺体の結果が一致する。マツノト遺跡の海岸線は発達した砂丘で現在でもウミガメの産卵場所として4月下旬から7月まで砂浜に上がり産卵するウミガメと、7・8月にはふ化する小亀が確認されている。

各章節の調査報告を総括するとマツノト遺跡は砂丘形成と出土遺物から4時期の砂丘形成とその遺物を含む4文化層が確認されている。遺跡全体に主体をなすのは兼久式土器でこの土器に外来系の資料や鉄製品・貝製品、脊椎動物遺体などの他に交易品としてのヤコウガイ等の資料から外的、内的要因を含み各種の活動拠点的な遺跡としての特徴が伺える。また、共伴遺物で外来製品の滑石を伴わないことも注目されよう。

兼久式土器の中でも第59図に示されているように主流をなす土器が認められていることからこれらの土器の系統と型式分類、様式が明らかにされ「兼久様式」・「兼久文化」をあきらかにし、その時代背景の解明が近づいたといえよう。

マツノト遺跡出土遺物の整理報告から今後は様々な角度とあらゆる視点からの考察も可能となり、これまで言られてきたありきたりの言葉ではあるがマクロとミクロの視点で考古資料、自然遺物、自然環境も取り入れた大きな視野からの研究の必要性をあらためて感じさせられた。

マツノト遺跡の出土資料は奄美・沖縄諸島においても6世紀から10世紀にかけての時間軸を考える重要な資料であり、また現存する遺跡の一部分約1200m²も砂丘の形成とクロスナ層が残っていることから層位的検証を行うことも可能であり、この時期もっとも空白とされる奄美・沖縄諸島の古代研究と大和文化との関係も含めべきわめて重要な遺跡のひとつであることに間違いはない。

おわりに

本報告書を作成するにあたり数え切れないほどの方々にお世話になりました。特に緊急発掘調査が行われ、大規模砂丘の調査と膨大な資料の出土で発掘調査を手伝っていただいた当時、青山学院大学博士課程在学の池田治には炎天下で照り返しも強い砂丘遺跡調査で皮膚がただれながらも平板に向かう姿が思い浮かばれる。地元の作業員の皆様方も多くの方々が携わりました。

発掘の現地指導においていまは亡き国分直一先生は資料の持つ重大さに遣唐使も視野に入れた視点を指摘されました。國學院大學の鈴木靖民先生は自ら費用を工面し、笠利町教育委員会と一緒になり、実行委員会を組織して平成7年のシンポジウム「よみがえる古代の奄美」でマツノト遺跡出土資料の重要性を訴えました。全国からの参加があり、改めて当遺跡の持つ重要性を考えさせられました。シンポに参加された先生方、関係者の方々も手弁当で参加していただきました。ありがとうございました。

平成15年から報告書作成のため整理作業が進められるなかマツノト遺跡における層位の確認と検証が重要となり、その調査に熊本大学考古学研究室の木下尚子教授をはじめ研究室の方々の共同研究という形で学術的な応援も頂きました（第Ⅳ章平成16年度層位確認調査の成果）。この確認調査には地主の株式会社「武富士」の協力も頂きました。ありがとうございました。

そして報告書作成に当たり専門家の分析と所見が必要になり玉報をいただいた先生方をはじめ半ボランティアで参加された地元出身で慶應大学博士課程の緑川（名島）弥生さんにも大変お世話になりました。このように一人ひとりの沢山の手を煩わせてやっとできた報告書です。本当は関係各位全員の名前を記してお礼を申し上げるべきですが長年にわたっているため一人でも記入漏れがあった場合は失礼にあたると思い差し控えさせていただきました。沢山の方々の魂と思いが込められたマツノト遺跡の報告書ですその刊行を心から皆様方と共に喜び合いたいと思います。笠利町教育委員会としての最後の仕事になりました。3月20日からは合併して「奄美市教育委員会」と名称が變ります。

2006年3月7日



調査区域 砂丘断面

(2. 層序で第1文化層
が2層をなしていると
のことはこの図版の左
上の部分である。)



1、2区 南側より



遺物出土状況1区 北西より



ヤコウガイ出土状況① 半島(白砂層)



ヤコウガイ出土状況② 白砂層



遺物出土状況 第1文化層



←第1文化層上

←第1文化層

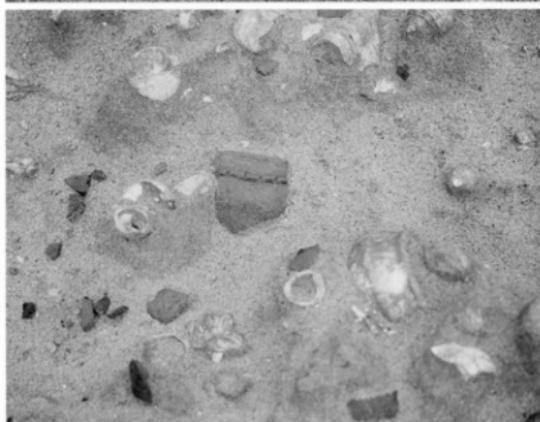
←第1文化層下

←白砂層

層序(11区) 東側より



脚足出土状況
(第1文化層)



土器出土状況
(第1文化層)

土製品出土状況
(第1文化層)



壺出土状況
(第1文化層)

土製品出土状況
(第1文化層)



土製リング出土状況
(第1文化層)





貝製品出土状況
(第1文化層)



貝札出土状況
(第1文化層)



雁又鏃出土状況
(第1文化層)



銅製リング出土状況
(第1文化層)



ガラス製管玉出土状況
(第1文化層)



発掘調査風景



調査員池田治さん



赤木名小学校発掘調査体験学習



休憩風景

笠利町文化財報告書第28集

マツノト遺跡

MATUNOTO SITE

発行 2006年3月

編集 鹿児島県笠利町教育委員会

〒894-0512

大島郡笠利町大字中金久52-6

印刷 シモダ印刷株式会社

